

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼稚園の教育

主 幹

堀 七 藏

第 二 十 五 卷 十 月 號 第 七 號

幼稚園教育の方法……………北澤種一	幼児の自由が保育者の豫定	か……………ムラサキ
哺乳に關する二三の事項……………堀七藏	秋の園場(二)……………竹島茂郎	我が幼稚園に於ける訛言の調査……………中村楠雄
赤い瓶・青い瓶……………水谷年恵	育兒叢談(四)……………記者	地から湧いた幸福……………金子彦二郎
幼くさ……………臥雲	衆ちゃん……………岡田美津	

少年常識叢書



東京高等師範學校 府立師範學校 各中學校 女學校 學官分擔責任執筆

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎	東京小松崎
三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著	三枝教諭著
海	空	無線電信、無線電話	南	昆	人	瓦	發	興	星	動	火	蒸	植	地
中	中	中	半	虫	の	斯	明	味	の	物	と	汽	物	震
旅	動	球	球	の	行	の	家	の	世	の	空	の	の	の
行	物	巡	巡	世	魔	見	算	術	界	活	氣	力	界	識
園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊	東京田邊
八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著	八教諭著
心	鎌	我	現	地	寫	理	飛	北	偉	世	鐵	國	格	算
の	倉	等	代	下	生	化	行	半	人	界	の	の	の	の
算	物	身	識	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術	術

後前頁十八百十數畫插裝美判六四

錢六料送 圓壹金各價定

卷十三全

◆呈進 本見 容 內◆

文部省
認定

東京高師茗溪會推獎
各都市教育會賞讚

東京市牛込區西五軒町四十一番地
發行所 文洋社

電話 牛込九一六番
振替 東京一五〇九四番

謹告

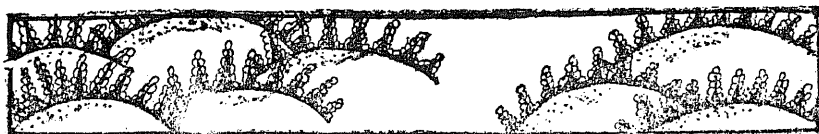
一、機關雜誌幼兒の教育は發行者を本會主幹堀七藏發行所を日本幼稚園協會に變更し、前發行者敎文書院越元新吉とは一切の關係を斷ちました。従つて幼兒の教育に關する一切の御通信は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會宛に御願ひ致します。

二、日本幼稚園協會譯幼稚園保育要目の版權は日本幼稚園協會が譲受けましたから御注文の方は當協會宛に御申込下さい。定價金壹圓五拾錢前金(郵税不要)にて振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に御拂込み下さらば直に御送附いたします。尙大正十二年十二月以降の幼兒の教育、多少殘本が日本幼稚園協會にありますから入用の方は至急御申込下さい。

大正十四年十月

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

日本幼稚園協會



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高等師範學校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

堀七藏

贊助員

東京高師教授

巖谷秀雄

東洋大學教授

柳橋源太郎

東京帝大醫科講師

乙竹岩造

東京府女子師範學校長

田子一民

東京高師教授

太田孝之

東京女子高師囑託

高島平三郎

慶應大學教授

大瀨甚太郎

帝國教育會理事

龍山義亮

東洋幼稚園長

唐澤光德

松江高等學校長

土川五郎

早蕨幼稚園長

岸邊福雄

京都帝大教授

野口援太郎

帝國教育會會長

久留島武彦

東京女子高師教授

乘杉嘉壽

東京高師教授

澤柳政太郎

文庫

弘田俊夫

東京女子高師教授

佐々木秀一

東京帝大教授

倉橋惣三

東京女子高師教授

下田次郎

文庫

松村武雄

東京女子高師教授

菅原教造

奈良女子高師校長

松本亦太郎

東京市學務課長

富士川游

奈良女高師附屬幼稚園主事

榎山榮次

東京女子高師講師

藤井利譽

東京高等學校長

三田谷啓

長崎縣師範學校長

藤五代策

東京帝大教授

湯原元一

文庫

富士末之助

日本女子大學

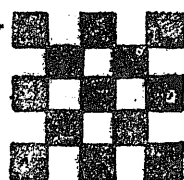
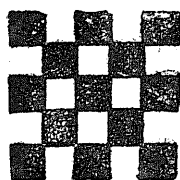
吉田熊次

文庫

谷本富

文庫

安井哲子



第 七 號 幼 兒 教 育 第 二 十 五 卷

—(次 目)—

幼兒教育の方法……………	北澤種一……………三頁
幼兒の自由か保育者の豫定か……………	ムラサキ……………二頁
哺乳に關する二三の事項……………	堀七藏……………一頁
秋の圃場(二)……………	竹島茂郎……………三頁
我が幼稚園に於ける訛音の調査……………	中村楠雄……………三頁
幼兒に聽かせる囁、赤い瓶青い瓶……………	水谷年惠……………二頁
育兒叢談(四)……………	記者……………三頁
地から湧いた幸福……………	金子彦二郎……………四頁
幼ぐさ……………	臥雲……………五頁
長編小説 兼ちゃん……………	岡田美津……………五頁



帝國美術院會員
東京美術學校教授

岡田三郎助先生
丹羽禮介先生
共著

忽ち再版

學校教育圖按畫集と其描き方

概念こそ其描法數
百の作例容易に
其道に入らん

案は一冊洋綴、極彩色、單彩色、石版、約六百圖、描き方數十頁、定價參圓八拾錢、送料拾八錢、のみにあらず、吾人が日常生活上にも必須、缺く事の出來ぬ教育指導の方法、また應用に實要求導くべき真書の乏しきにある。本書は専ら一般圖案、特教育圖案に關する概、法作例數百數を鮮明なる石版印刷、極彩色、單彩色、を以て示して、何人にも容易に其道程に入らしむ、同好の士の精讀研究を俟つ。

帝國美術院會員
東京美術學校教授
岡田三郎助先生
丹羽禮介先生
共著

學校家庭之クレヨン畫集と其描き方

線より畫になる
迄の順序こそ其模
範畫集!!

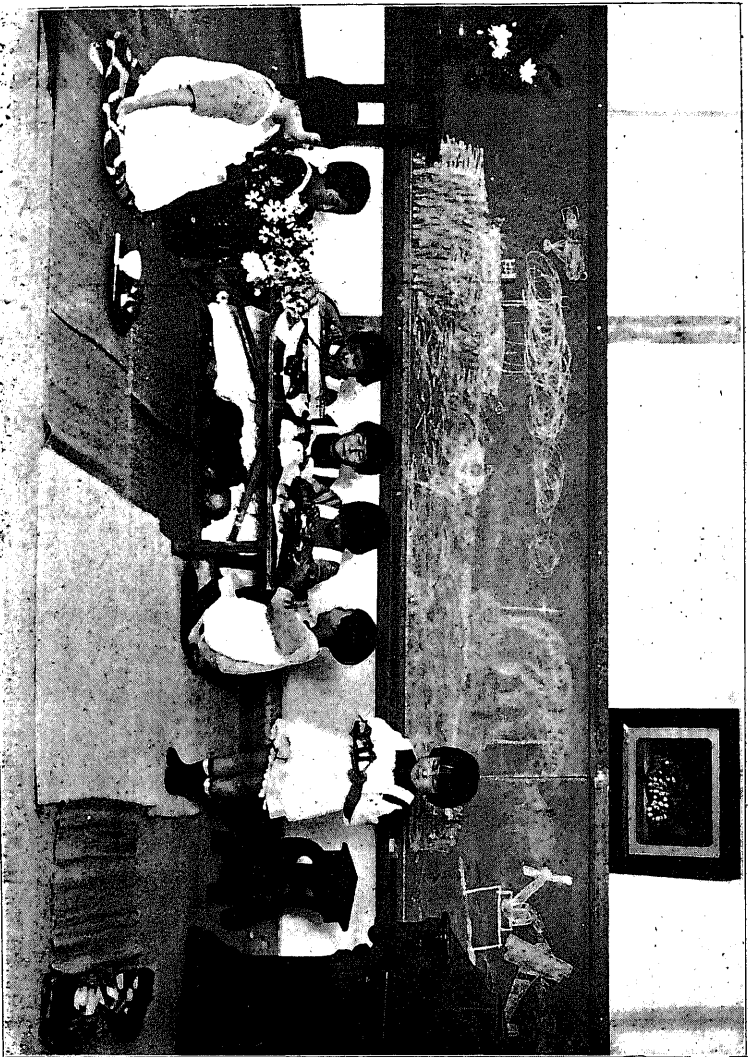
第一冊洋綴、彩色、約百畫、畫になる迄の單彩色、約百畫、描き方約五十頁、定價參圓八拾錢、送料拾八錢、眼で正確なるものを、頭腦で之を會得し、さうして指導者の教育に俟つ。蓋し本書公刊の所以である。本書は指導者に對する希望、順序と練習を教じ、内容の作畫、人物、鳥獸、蟲魚、風景、花、卉、蔬菜、器具等數百畫、盡く一本の線より段々と繪となる迄の順序と描き方を示し、加之岡田丹羽兩畫伯の模範畫數百を以てクレヨン畫の眞髓、教育者は勿論各家庭の必備を推奨す。

女子學院教授
黑田芳生共著
上甲二郎著
新刊

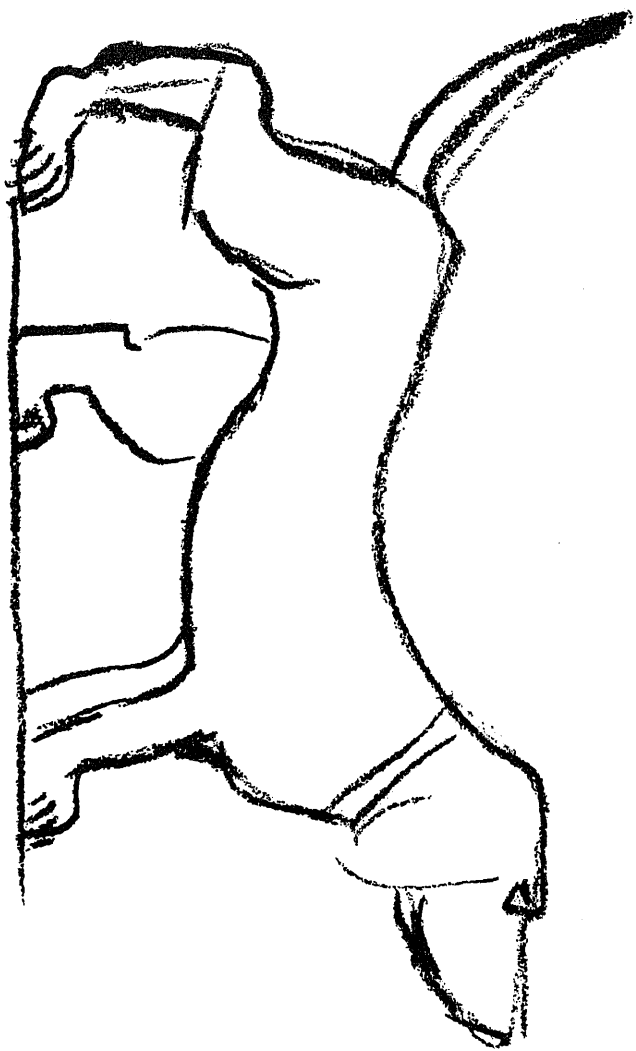
兒童の描いたクレヨン鑑賞畫集と其批判

彼等!! 兒童の
世界より生れ
た絶好の鑑賞
額畫の提供!!

藝術教育の双翼の一、大判原色畫十二葉、觀賞額用、批判指導手引全一冊、定價二圓五十錢、送料八錢、つてあらばならぬ鑑賞の一面に至つては、殆んど何等の工夫、考案を見ない。成程古今東西優品の輯集はある。然し是等は、何れも最高級のものとて、兒童の藝術生活と懸絶し、彼等の世界から餘りに遠い。一步一歩健全なる向上の途に導くものとして、どうして、兒童の藝術生活と懸絶し、彼等の世界から餘りに遠い。蓋し本書公刊の所以である。本書は全國の小學校から廣く兒童畫の優品を集め、其の中より特に代表的もの、各學年二冊とし、右畫集の教師用書を編して之に附することとした。二者相俟つて試作鑑賞の效果は一層顯著ならん。



園 稚 幼 屬 附 び 遊 と ご い ま の 児 幼



(兒 歲 六) 助 新 米 久



號七第 育教の兒幼 卷五十二第

月十年四十正大

一、教育で家庭教育位重要なものではありません。家庭教育の良否は實に人一生を支配し國家の發展を左右するのであります。最近の學術は益々家庭教育の重大なる使命を立證し近時の社會現象は善良なる家庭教育の必要を痛感せしめてゐます。

一、家庭教育の短を補ひ幼兒の心身を充分に發達せしめ將來受くべき學校教育の基礎を築くものは幼稚園教育であります。幼稚園教育の重視すべきことは天下一人も異議がないのであります。

一、幼兒の教育は本邦唯一の幼稚園教育に關する發表機關であります。而してまた本邦唯一の家庭教育雜誌であります。

一、幼兒の教育は幼兒の教育、即ち家庭に於ける教育と幼稚園に於ける教育、更に小學校初學年教育に關する事項は細大となく網羅し、以て家庭教育の向上を計り、幼稚園教育の進歩發展を期する大抱負をもつて産れたもので有ります。

幼兒教育の方法^ヲ (二)

東京女子高等師範學校附屬小學校主事

北 澤 種 一

(七)

さてナーセリースクールがどういふ點に力を置いて居るかは此法令によつても分る事ではありますが英國の教育制度では地方教育の力を持つてナーセリースクールを設け適當の設備をする事になつて居ります。ナーセリースクールの子供は滿二歳から五歳までであつて、都合によつては五歳以上の子供も入れてよいが、其の場合は文部大臣の許可を受ける事になつて居ります。そして身體的及精神的の發達につとめるといふ事であります。然も身體の發達にはあらゆる努力をせねばならないのであります。幼稚園が小學校と異なる點はナーセリースクールが示して居る様に精神上と身體上とを共に考へねばならない點にあります。身體的方面を特に我々が注意せねばならないと言ふ事は其の身體と精神の分化がはつきり分れて居ないといふ幼稚園時代の特色を尊重したのであります。そして身體的方面を力説して精神的方面を閑却しない程度に、即ち精神的方面には消極的に注意して行けばよいのであります。

(八)

ナーセリースクールに次いで起つたものはデー、ナーセリー、スクールであります。普通の幼稚園校は三歳から七歳までであつてナーセリースクールは二歳から五歳まで、デー、ナーセリー、スクールは満八九ヶ月から二歳までであります。それは託児所と同様なものでありまして、文部省の管轄によらず衛生省の管轄に屬して居ります。教育的と言ふよりも寧ろ社會的の事業であります。此の結果及効果と言ふものはまだあまり世間一般に知られて居ないものであります。今後新しい勢力を得て又大いに發展する餘地のあるものであります。ナーセリースクールがもし小人數の場合には之れをナーセリークラスとして行つてもよいのであります。クラスの場合には小學校の一部をかりて行つてもよいのであります。然し此の場合に於て注意しなければならない事は、往々小學校の精神にかぶれてしまふものがありますが、決して其の様な事なくナーセリースクールの務めねばならぬ所を務め、其の精神を忘れない様に獨立して行かねばならないのであります。そしてナーセリースクールとして務めなければならぬ事は一個人一個人の子供をよく觀察して特に衛生方面の注意を怠らない様にしなければならぬのであります。

(九)

ナーセリースクールは第一に從來の幼稚園といふものが考へて居た點よりもつと身體的方面に考へ

を置いたと言ふ事もあるが、更に一人の子供と一人の保姆の間が非常にうるはしく親密であつて、常に保姆の心は子供の中に生きて働いて居ります。第二幼児には適當な休息を與へる事が必要であります。現在の我が國の託兒所等に於ても幼児の休息と言ふ事を考へて晝寢等を用ひて居りますが、この遊び疲れたる子供を如何に休ましめるかはナーセリースクールの一つの仕事でありました。第三には幼児に適當な榮養を與へることであります。幼児に適當した食物を選定して與へることは幼児の發育には至極重要なことでありますから之を敢へてするのであります。

(一〇)

次にナーセリースクールには一定の訓練をする事を要します。それは1身體的、2精神的、3社會的で、この三つの訓練をする事が必要であります。然して身體的・精神的・社會的の事を訓練し、廣い意味の習慣を養成しなければなりません。然も其の習慣養成の方法に就いては賢い指導者の指導の下に行はねばならないのであります。之の習慣養成の方法が從來は極めて強制的でありまして教師の方から仕込まれる事ばかりでありました。即ち熟練した賢い指導者が此の子供には此の習慣が必要であるからといつて定まつた様な習慣をつけられるのであります。子供の自動的の遊嬉の中に得られる習慣の必要といふ様な事は全く顧られなかつたのであります。從來の幼稚園に於ては此の種のもが多く、自動的に得る習慣等はあまり考へては居りませんでした。自動的の習慣をつけると言ふ事の

爲には幼児を共同にして共同の生活をさせる事が必要であります。即ち色々の年齢の子供を秩序よく集合させるので四歳の子と五歳の子と聯合し、三歳と四歳と聯合させるといふやうに按排するのであります。元來人を統御し人に統御されるといふ事は幼児の心の中にも多く潜んで居る事でありまして大きいものは小さいものを統御し様とし、小さい者は小さい者で大きい者の統御を受け様と務めるものであります。從來の様に同年齡の子供を集合させる場合にはよく集合する事はしましたけれ共、右の様な大小の間の事實はあまり起らないのであります。年齢の差のあるものを一つにする時には色々の社會的交渉が起つて參りますが故に社會的訓練をするには最も必要な事であります。

ベスタロッチ、フレートベルハウスへ行つて見ますと、各々の室がグループが非常に小さくて其の室にはすべての家庭的の備設がしてありまして飯事遊び等自由に出来る様になつて居りました。或室は四歳の子と六歳の子と交つて居りましたが之れは極めて自然的であります。家庭に於ても一つの家族が同年齡の人が七人も八人もよつて居るといふ事は考へられないのでありますから即ち不自然な事ではありません。自然的にし様とすれば色々の年齢の子供を集めるといふ事は子供の自然の力を利用した、かつもつとも合理的なやり方であります。大きいものは小さいものを支配し、小さいものは大きい者に愛されると言ふ事は自然の力でありまして、ナーセリースクールが又此の點に力をつくした事は見るべきであります。この社會的見地から將來の社會を組織するものが如何に親密に組織するか、又

如何にしたならばそうさせられるかと云ふ事は教育家も政治家も心理學者も共に皆が研究して居る所であります。他の家から來た人と自分の家から來た人とスクールに來たからには直ちに人と人と密接に結合し接觸しなければなりません。どの點に於て結合し接觸するかは學校に於て訓練しなければならぬ一つであります。社會に於て同輩といふ考へが今日程要求される事はないのであります。外國人も自國民も男女も同輩であるといふやうに、平等的に考へられて來たのであります。そして同年齡又は同國民の結合よりも他國民と自國民と、又は年齡の異なるものとの結合は確實なものであります。何故ならば、同年齡の結合であつたならば、直ちに離散するかも知れないのであります。之れが差異のあるものに依つて作られた結合は本當にしつかりとした結合をし得るのであります。經濟上からも社會上からも歐洲の男女は或一面に於ては非常に強く結合し或一面に於ては全く離れてしまふものであります。此れには又種々な原因のある事と思はれます。

次に同一興味を中心として手段として働く時には愉快な生活をし意義ある社會生活を行ふ事が出来るのであります。

即ち興味の中心が一つであれば自然と四歳の子も五歳の子も先生も皆結合し得るものであります。ナーセリースクールとしての務むべき道としては先程申しました如く其の子供の發達を考へ之れを教へなければならぬ事は申すまでもない事であります。幼稚園とナーセリースクールとが大體御分り

になつた事と存じます。

(一一)

歐洲大陸を見ますと英國流のナーセリースクールは中々に盛んでありますが、やはり從來のモンテッソーリ式の考へと云ふものが或程度まで教育界を支配して居ります。此の點から言つてもモンテッソーリ女史のやり方と言ふものを考へて見る事も又必要な事と思ます。モンテッソーリの理想を考へて見ますと必ずしも新しい考へではなくて、彼が感覺を練習せしめる爲に考へ出した器械器具の類は從來からのものを色々に考へて、子供に適當なものに作り代へたに過ぎないのであります。モンテッソーリ女史は自動裝置といふ事を非常に考へた人でありました。自動裝置(組織)といふ事は生物學の研究と相待つて以來教育者間の問題とされて來たものであります。即ち從來の考へ方によりますと、幼兒及び兒童といふものは教育者と言ふ刺戟の下に、刺戟によつて反射するものであるといふ様に子供を反射的主體であるとして考へて來たものであります。然して子供を一箇の反射的物體としての考へ方は可なり長い間教育者間を支配致して居りました。故にこちらからどれだけの刺戟を與へれば子供の方からどれだけの反射をするかと言ふ様に精神的でなく物質的の考へ方があります。材料によつて反射し活動する器械であると考へますが故にどういふ材料を與へればよいか、よりよく多くの材料をあたへて多くの反射を得様として教育材料の研究が行はれて來たのであります。學校で言へば學

科課程ともなるのであります。

即ち材料の如何に依り反射の角度に大小が生ずると考へて居りました。その反射が活動の方面になりますと彼等の發表の仕事と言ふ事になつて來るのであります。發表活動、製作活動が幼児でも敎育上重要な意味あるものとして考へられて來ました。然るに兒童に對する考へが段々に研究されて來るに従ひ、子供は如何なる時にも外界から受けたものに對する反射運動のみをするのみでないと云ふことを考へて來たのであります。兒童を生物學的に見る考へが行はれて來て、兒童は外界から受けたものを其のまゝ外に出すのではなくて、幼兒は外から來たものにも外に出す物にも主觀が伴ふものであるといふ事が分つて來ました。

(二)

次に理解的心理學が主張せられる様になつて來ました。理解的心理學は從來の説明的心理學とは異なるものであります。從來の説明的心理學は説明するには十分であります。即ち泣くといふ事は悲しいからである。何故悲しいか。彼は大切な御菓子を取られたから其れが刺戟したのである。と考へて行けばこゝに十分説明がつき、説明的心理學としては十分であります。即ち或る件に對して原因をあげれば其れで満足し得るのであります。然しこの説明的心理學は主知主義でありまして、主知主義では本當に子供を理解する事は不可能であります。説明が分つた。それでは説明を理解したのであつて本

當に子供の心理を實際的に理解したのでは無いのであります。理解するのであつたならば其の心理に同感し共鳴するのではなくてはなりません。我々が神佛に祈願をするのも神佛が自分の心を心から同感し共鳴して下さると思つてつまりうつたへるのであります。又共同的體驗がなければなりません。即ち同感唯感したのに過ないのであります。其れを體驗するのでなくてはなりません。子供が泣く時には説明的にすれば色々の原因も見出されるのであります。兎に角前からの道程があつて、事件があつて、其れが遂に感情にうつたへて感情の爲に泣くのであります。其の事件を經驗し同感し共鳴し之れを體驗してやる事が出来たならば、本當に其の子供を理解する事が出来得るのであります。心理學は特別に之れを學ばないでも長い間幼児に接し大勢の子供に接してゐた人々は之を理解する事が上手であります。其の理解の仕方普通學者が説明的に理解するものではなく其の子供と同じ心になつて同感し得るのであります。自分の經驗を精製した人は其の子供を知り子供の體驗した事をよく理解する事が出来るのであつて、必ずしも心理學を多く學んだ人がよく子供を理解し得るものであるとは限つて居ないものであります。理解的心理學はまだ十分に發達してゐないのであります。心其のものゝ心理學にふれるといふよりも自分自身生れながらの幼児に對する天才と自分の長い間の經驗とによつて子供の心を十分に理解する事が出来たならば此れ以上よい事は無いのであります。かのモンテッソーリ女史は科學的立場から考へて見なければならぬと言ふので、修養の材料として心理學

を學んだのであります。けれども彼は又天才的に子供を理解する事が出來得る人でありました。そして自動装置は幼兒の材料によらずに、自分の精神に何らかの反應を與へて其れに依り反射を否定するものであります。此の間を一貫した統一的の我が内界の刺激、外界の刺激によつて外界に表はすものが即ち製作及び發表であります。寧ろ私の活動があつて外の影響を取入れて我を延ばして行くものでありまして、其れを延す中に發表製作を行ふのであります。常に外界に對し我を中心として居るものであります。そして色々の機關を用ひながら然も反射的に進むのではなくて一直線に進むものであるといふ考へ方がモンテッソーリ氏の考へであります。その具體的の表れはモンテッソーリ氏の自動の教育でありまして、一例を上げますと、之れは有名な御話ですが、

聽覺の練習として室内をまつくらにして置いて其の眞中に幼兒を立たせ音のしない様に先生の所まで來て御覽なさいといふ命令を與へるのであります。子供はそろ／＼椅子を立つて先生の所に來やうと致します。すると衣ずれの音が致しますから非常に驚き、我と我が耳に聞えるので先生の命令に添ふ様にと言ふつもりで一心に音のしない様にとつとめます。

A ならAだけの音を立てますと自分の耳に又Aだけの響があり、Bの音をたてますと、又自分の耳にBに相當する音が聞えますからあわて足を制してそろ／＼と行ふ様にするのであります。又子供はBの音に失敗して更に氣を静め注意に／＼をして骨を折つて立ちより音を立てずに立てた事に本當に

自分ながら得々とするのでありませう。さあ立つて後先生の台圖に子供は再び注意しながら其の方向に歩いて參ります。其の時も前と同様に自分で自分の耳に聞える音に氣をつけて進んで行くのであります。即ちこの様なのは一例に過ぎませんけれ共外界からは唯ほんの僅かの刺戟のみしか與へず他は悉く內的刺戟によつて幼児自らがそうするのであります。そして幼児は先づ足の筋肉を調節した結果として音をたてずに先生の所に行けた。その事に無上の満足を感じるものであります。この様なのを稱してモンテッリーの自動教育といつて居ります。其の根底に横はる考へは我と云ふものは我々が外から教育しないでも其の我の力によつて幼稚園で要求する様な事は行ひ得るものであります。(未完)

幼児の自由か保育者の豫定か

附屬幼稚園 ム ラ サ キ

幼稚園で保育の手段としていろいろの作業をするのに、これを幼児の自由意志に従つて選擇を任すべきであるか、或は保育者の設定のもとにするべきものであるか。この問題については當園を參觀せ

られた方々や、又地方からわざわざ、お問合なども屢々あります。それで現在私共のやつております方法をあらまし申し上げてこの問題に對しての御參考に供しませう。

保育の項目と申しませうか、

お話、唱歌、遊戲、自由畫、ぬりゑ、粘土、紙仕事、きりがみ、つなぎもの、織紙、大工仕事、觀察

などをとつております。これ等を大體一週間の豫定案としてふり分けて、時間割の様なものをつくつておきますけれども、天氣の都合や幼兒の様子によつて時々豫定通りにはなかく、まゐりません。繁雜になるのでわざと分團保育をさけて一齊保育として、例へば左の如き豫定を立てます。

月 お話 自由畫

火 遊戲 紙仕事

(ボール、紙などで家具をつくる、共同製作のときもある)

水 唱歌 粘土

木 お話 ぬりゑ 觀察

金 遊戲 自由畫

土 唱歌 きりがみ

毎日の在園時間を朝九時より午后一時半までとして居りますが、月曜日ですと大抵幼兒は九時半頃

になると出揃ひます。それを見はからつてお話を始めます。大きい組の人たちは幼児自身も時々お話をはじめるかはり、一つのお話位ではなか／＼承知しないで、大抵二つ三つになります。

次は自由畫の豫告をうけると、幼兒は各自の筆筒から帖面や筆箱をもち出してかきはじめます。このうち數名づゝはかはるがはるに黑板畫にすることに決めております。描く題材や使用するクレオン色鉛筆等も幼兒の自由です。かき始めは皆一緒にしても一枚でやめさせさつさと自由遊びに移る兒や二枚三枚も得意になつて一時間ほども描いてゐるものもあります。自由畫に限らず、粘土でも紙仕事（個人）でもまたきりがみなどでも大體これと同じ形式をとつております。

ぬりゑ、織紙の様なものはとにかくそれが出來上るまではつゞけてすることにしておりますから、早く出來た人は早く自由遊びに移るわけになります。大體午前が始のうちに作業をつゞけて、後を自由遊びにしておりますが、冬季さむくて指さきの自由にならない時は特に午后を使ひます。しかし自由遊びで疲れて午前中ほどの成績はあがらない様です。

自由選擇といふ事を幼兒には如何程まで徹底して出來るかは疑しい事ですあります。數年前に時々一週間位づゝ續けて自由選擇をやつてみた事がありますが、その選擇の様子を観察してゐると、全く自己の意志できめる事はごく少くて、お友達が粘土をやるから自分も粘土をする。又大工仕事はしばらくなかつたから、我も我もとやり出す様に珍らしいものを好む心からで、判然と大人が自分の得意と

し長所とするところを見出してその専攻學科をきめるといふのとおもむきを異にしてゐるのであります。

要するに幼稚園の作業種目は大體において幼兒の力に適する程度のものでありますから、幼兒自身の興味の深淺こそありますが、きらひだからやらせないといふ我儘をおし通させない様にしたいものです。尤も入園當所には何をしてもらふといふ幼兒もよくありますが、お友達のをやるのを見てゐるうちにだん／＼ひき入れられていつの間にか仲間入りをするのであります。それを保姆の氣短で早く／＼と強ければ幼兒の方ではかへつてこれをさけるのであります。二年保育のうち在園中にどうしても他人と一緒に何事もしなかつたといふ幼兒はほとんど見ない様に思ひます。最後にこれは私共が指導を受ける先生からま／＼伺ふ事ではありますが、保育の項目は一度きめればそれを唯一のものとして長年これにのみ従つて一つの形をつくり上げるものでなく、常に時流に従つて取捨選擇すべきものでありませう。





哺乳に關する二三の事項

堀 七 藏

一
嬰兒がお乳をのむことは本能であります。唯が教へたこともなく、また少しの練習なしに親の乳房を探します。またこれを口にくくませますと吸乳の働作をするものであります。このことは吾人人類に限つたことではありません。凡ての哺乳動物に共通のことでもあります。生れて一時間位の仔牛が親を探し、親の方にヨチ／＼と歩いて行きます。勿論眼がよく開いてゐるのでありますから、臭で親の居るところを感知するのであります。またお乳をのまんとする目的で親をさがすのでもありますまい。只本能的に親牛に近づくと、親牛に近づけば、その腹の下にもぐり込みます。産後でまだよく腹痛が回復せず、後産の下りるので時々腹痛を催す場合でも、親牛は仔牛のためには只その爲すが儘にして居ります。

仔牛は切りに親牛の乳房のあたりを探がすのでありますが、そのうちに乳房が口に觸れますと彼は

吸ひつきます。勿論手際よく吸ふことが出來ず、またお乳が出ないやうでありますが、反覆乳房に吸ひつきます。

かくて仔牛は遺憾なく捕食の本能を示し、親牛も亦授乳の本能を發揮するのであります。御承知の如く人類でも嬰兒は眼がまだ開かないにもかゝはらず、若し親が乳房を彼の口にふくませますと見事に吸着します。また親は授乳によつて本能の満足が出來ます。若し吸乳の本能が嬰兒になかつたならばどんなでありませんか。鳥類のやうに固形食を本能的にとることの出來ない嬰兒が餓死することは實に明白ではありませんか。嬰兒が吸乳本能を有することは實に重要なことで、たとへ親に授乳の本能が缺けてゐても、親の生命には關係ないかも知れないが、嬰兒の生命は實に吸乳本能にかゝつてゐるのであります。それでこの吸乳本能は更に進歩して捕食本能となりますが、食慾と捕食の方法は本能的に生命と共に得てゐるのであります。

二

本來「胃は何をするものか」をよく理解しない母親は、嬰兒の本能を無視することになり、その結果嬰兒の生命を間接ではありませうが、失はしめることが多いのであります。一體胃は食物を溜めて置く袋であります。食物を消化する働もありますが、それよりも食物を溜めて置くのが胃の重大な使命であります。鳥類でも哺乳類でも皆胃は食物を溜めて置く役目のものであります。御承知の牛で

は胃が四個あつて、大急に敵のゐない間に捕食したものを第一第二の胃に溜めて置きます。そして敵の來ない所でゆつくり噛み直すのであります。所謂反芻するので有名でありますが、人類の胃は牛の胃とは大に違ひます。反芻するのでないから、胃が四にも分れてゐる必要がなく、縦になつたゴムの如き袋であります。大人では一・五立所謂胃擴張といふ病氣にかゝつてゐる人では二立以上も入りませうが、嬰兒などでは寧ろ袋といふ方が無理な位で、筋肉の太い管であります。食道と腸との中間にある稍々太い所が胃といつてよい位であります。

かゝる胃を持つた嬰兒には一時に澤山のお乳をのませることは無理であります。またお乳をのんだばかりの所を頭の方を低くしたり、また胸腹を押したりするやうなことをすればお乳を吐くのは當然であります。お乳をのませた後直に嬰兒をお負つたりすることの無情が、すぐわかるではありませんか。一回の授乳量はいふまでもなく嬰兒が乳房を自然に放すときであります。嬰兒は本能的に胃が空になれば飢餓を感じ、吸乳の働作を行はんとするものであります。多くは泣いてこの本能を表示する。また胃が満ちればそれ以上に吸乳せんとする欲望はない。「今うんとのんで置かねばならぬ」といふ欲望のない嬰兒は、自然に乳房を放すのであります。それを「これから何をするからお乳をのませる譯に行かぬ。サア澤山ののんで置かない」などと自然に放した乳房を更に嬰兒の口に含ませる母親があれば嬰兒の胃を乞食袋とでも間違たものでありませう。かくしては消化不良を起さしめ、可愛ゆくて

たまらぬ我兒の首を間接にしめてゐるものでありませう。

三

曾つて北陸線で旅行したとき、汽車中で見た事實を想起するのであります。まだ年若き一婦人が生れて四五ヶ月位の可愛い嬰兒を抱いて私の隣に座席を占めました。二等が相應に込んでゐたので、特に私が席を譲つた位でありましたが、夫たる人は確かに立つて居りました。

兎に角漸く座席についたかの夫人は直に胸を開き、はつて來た乳房を嬰兒の口に當がつたのであります。勿論嬰兒は吸乳を欲してゐたのでありませうが、母親は坐つたからお乳をのませるといふ習慣からであつたとすれば、必要でないお乳をのませられる嬰兒こそ迷惑でありませう。どんなことでも泣くより外に發表機關を持たぬ、意志表示の方法を知らぬ嬰兒でありますから果して泣きました。心ある親は嬰兒の泣聲でその欲求の何たるを理解すると申します。お乳が欲しく泣くか、ねむくて泣くか、またどこか痛くて泣くか、その泣聲でよく分ると申しますが、經驗の乏しい若き夫婦では分りません。若き母親はお乳が欲しく泣くものとのみ思つて居りますから、太きな乳房を嬰兒の口に當てます。成程嬰兒は乳房に吸着きます。そして吸乳せんとするのでありますが、すぐに泣いて乳房を放します。放して泣きますから、若き母親は更に乳房を嬰兒の口に當てます。吸着くかつかぬにまた泣きます。嬰兒は泣き若き母親は乳房をふくませる。ふくませるとまた泣く。しかも火のつくやうに泣き

ますから、車内の視線はこの若き母に集りました。前に立つてゐる夫も勿論若き母を手傳つて嬰兒にお乳をのめんと苦心するのであります。隣席にゐた私はすまんとは思ひつゝもつい若き母親の動作に注意し、嬰兒の泣く有様を観察するに至つたのであります。そして「あかちやんの鼻の孔がふさがりますよ、乳房を一寸持つてふくませて御覽なさい。呼吸が出来ないで泣くのですから」と注意したのであります。「イイエねむいのですよ」と若き母親は返事しつゝも私のいつた如く乳房を指で押いてふくませてゐました。嬰兒は三十分以上も泣いた後で結構お腹がすいてゐたものと見え、また今度は大きな乳房で鼻孔を塞がれる心配もないので、喜んでお乳をのんで、五分もたゝぬ中に自然にねむつてしまひました。それで私は思つたのであります。「お乳をのませる母親はわが子のおながが空いたことを知り、またわが兒のねむくなつてゐることを感ずるが、わが兒が一瞬間も呼吸せずにはゐられないことを眞に感得してゐるものが少い。さればこそ添乳して嬰兒を窒息させる實例に乏しくない、大きな乳首は嬰兒の口に一杯となり、大きな乳房が鼻孔を壓迫すれば泣くに泣かれず、もがくに手足は充分働かぬ嬰兒であることを眞に理解せぬものではあるまいか。世の若き母親達よ。生物は一秒間も呼吸を停止することが出来ないことを三省すべきではないか」とつくづく感じたことがあります。今も思へば當時の光景が眼前に髣髴いたします。若き母親のお乳をのめんとする努力と汗、泣く嬰兒の苦痛と汗、ハラ／＼して立てる夫の態度。



秋の圃場 (二)

第六臨時教員養成所教授 竹 島 茂 郎

(1) はるしやぎくは丈二三尺にして、花形やゝコスすのを見ることが出来る、之は昆蟲が來たと思つて花粉を持ち運ばせる積りで吐出するのである。

に繊細である、花は外鮮黄内樺茶にして、風となびきて舞ふが如き姿は得も云はれぬ風情がある、
(3) ひしとりなでしこは石竹科のもので、莖の高さ一二尺、上の方の小枝には夫々節の下に粘液を分泌するところがある、花の色は紅稀に白であつて花形は大きくないが簇生するから一寸美しく見ゆいから見ばえがない。

(2) やぐるまぎくは葉は細裂して莖葉に白色を被む

ものである。

つて居る、花形矢車に似て、色に紫・白・赤・桃色等がある、蕊のまだ花粉を吐かないものに鉛筆の先を觸れさせると、モク／＼と澤山白い花粉を吐出するがよい、花の美しい事は皆人の知るところで

(4) けし・ひなげしは罂粟科のもので、移植は甚だ困難であるから、初めから本圃に筋蒔にして間引

ある、此の植物は子房・果實・種子の説明に大層便利なものである。

(5) スキートビーは荳科植物で外國の「えんどう」

と云ふ格である、但し我國の「えんどう」は實を目的として栽培せられるもので、花は中々風情があるけれども餘り珍重しないが、西洋の「えんどう」は花を目的とし栽培せられて居る關係で斯様に美しい花が出来たものと認められてゐる、丁度其反對の有様は「さくら」に於てよく現はれて居る、即ち日本の「さくら」は花を主とし、西洋の「さくら」は實を主として栽培せられたものである。

(6) こばんさう・ひめこばんさうは禾本科のもので小判形の實が澤山なりさがつて風に搖られるところは甚だ面白いものである、花壇の縁栽として適當である、床蒔にして移植するもよく、又初めから本圃に蒔いてもよい。

(7) バンジーは莖菜科のもので、黄・紫・白の三色が混つて居るところから三色すみれの名を得たものであるが、頗る變つたものが多い、英國の原産で

パンジーの名はセキヌビヤの命名であると言はれて居る、此の植物も栽培は極めて容易であるから、特に注意事項を述べゑる迄もないが、害蟲の中に「なめくぢ」は葉よりも寧ろ花を食害するから、之を驅除することに注意せねばならぬ。

(8) チュリツプは百合科のもので球根を植ゑるのである、排水のよい砂混りの腐植土が宜しい、四月花を開くのであるが、一株に一つより咲かぬところから、貞操を示すものだとして珍重せられて居る葉の枯れた後は掘り出して一兩日日蔭に乾しい涼しい所に保存し、秋になつて再び植ゑるのである。

(9) ヒヤシンスも百合科で四月頃、緋・紅・碧・白等の誠に美しい花を咲かせるものである、取扱は前者に同じ。

(10) すゐせん・アネモネ及びさふらん等も秋植ゑの球根類である、すゐせんの中近年輸入せられた喇叭咲水仙は一寸面白い品種である。

秋の終りになつてそろ／＼霜が降る様になるとダリーヤ・カンナ・ゆり等の寒さを嫌ふところの宿根草類は、早速掘起して一兩日乾かして土を去り日當りよき乾きたる地面（南向の縁の下等）に穴を掘つて粗殻を入れ、其の中に隣のものゝ觸れ合はぬ様にして埋めて置くが宜しい、球根を掘り起すとき特に注意を要することはダリーヤの球根で

ある、之は「さつまいも」の様に實際根に養分を貯へたものであるが、併し此のものは全く不定芽をもつて居らぬから、一つ一つの芋をつぎらしては其の球根は全く芽を出すことなくして腐つてしまうから、一つの株に多くの球根が着いて居ても一つも離すことなく其のまゝそつくり掘起して保存し、翌年四月頃に於て芽の出かけたのを認めて其の芽によつて球根を切り分ける様に致さねばならぬ。（終）

我が幼稚園に於ける訛音の調査

和歌山幼稚園長 中村 楠雄

□近時我が國の教育界はすべての方面に元氣な躍動を示して來たが、また國語教育界に於ても様々な議論や運動が起つて來た事を慶賀せずにはゐられぬ。

ひるがへつて幼稚園の世界を眺めて吾等保育に従事するものも大いに注意し努力する所がなくてはならぬと信じるのである。

而し實際幼稚園では、はつきりと國語教育の必要と云ふ事を頭に置いてやつてゐるかと云ふ事を考へて見ると幾分ややこしいのでないかと思はれぬでもない。

一體幼稚園の教育程大切なものは決して他になくすべての教育の——將來の爲めの——基礎を建設するのが幼稚園の重大な任務である。

その目的を達せんが爲めに或は歌を歌はせもするし、或は遊戯をさせもすると云ふ風に色々の事が行はれるのである。

けれども其の間に大切な國語教育としての作用が如何なる風に取扱はれてよいか。

ここに於て吾々は幼稚園の國語教育と云ふものに就て特別な系統案もほしい。正しい見解も持ちた

いのである。

従つて今後幼稚園の國語教育に就て各種の研究や調査の起つて來る事を切望に絶えない。

□さて私は只今第一着の訛音の調査をやつて見る事にした。と云ふのは今度私はこちらの幼稚園を預る事になつたに就て直接子供に接して見てオヤツこれは相當訛音がひどいぞといふ事に氣づいたのであつた。そして早速全園に渡つて調査をして見たがその結果は豫期以上それは驚く程の結果であつたのである。これに就ての統計は別表の如くなつてゐるから御覽頂き度い。

そして此の訛音の矯正などは勿論一人幼稚園だけの努力ではすこぶる困難だと考へるが左の二つの理由からこれらは幼稚園として本當に努力すべき筈の要點ではないかと考へる。

▲兒童に訛音を持つてゐるといふ事はその子供
の家庭か、近隣かに必らず發音の悪い人が

あり又家庭が耳なれて氣づかずにゐるのだから幼稚園へ来てこそ始めて家庭も子供も注意されて良い言語を得る事になるのである。それでこういう問題に幼稚園が努力する事は、家庭から言へば本當に幼稚園へやる御かげを受ける事になるのだし、幼稚園から言へば眞に家庭で出来ない仕事をする即ち幼稚園の生命を生む事になるのである。

▲何でも基礎時代の注意が必要である事は明らかであるが、この訛音の様なものでもかたく耳にしみこんでしまつた後は、たとひ本人が自覺しても中々矯正出来るものでない。本人にはダイコン(大根)か、ライコンかは文字では區別はついても、耳できく時は全く同じ様に聞えてこれを區別する能力がなくなつてしまつてゐる様な事實を大人にも子供にも發見する。

こうなつては此矯正の効を擧げることは實に至難であるが幸ひ幼稚園時期は言語に於ても收獲時であり身體の如何なる風にでも矯正出来る様に言語に於ても最も矯正の擧げやすい大切な時期であるのだから、この重要期をはずさぬ様に幼稚園等は努力を惜しんではならぬ。

さてこれが矯正の實を擧げることは前にも一寸しるした様にとても幼稚園だけの努力では致されるものでない。子供の最も生活時間の長い家庭に於ては最も用心すべきで吾々保育事業にたづさはるものは自ら園内で努力すると共に常に家庭の自覺を促し協力事にあたるべきである。

□私の最初の調査に用ひた問題及結果は別表の通りであるから、それでごらん頂き度い、さて私の只今意を用ひんとしてゐるのは主としてダザラ三行間の混同であるがこれは我が和歌山の事情上最

も最初に注意すべき點であると考えるからである。

訛音調査統計表

一、調査問題 カラダ。 モミヂ。 ミヅ。

デンシヤ。 コドモ。

一、調査人員 男九四 女九一 計一八五

一、不正者數 男八三 女八一 計一六四

一、佳良者數 男一一 女一〇 計二一

一、調査人員ニ對スル不正ノ割合 八割九分弱

一、問題別ニヨル調査 一、不正程度調査

1カラダ 不正男八三 女八一 1 一語 不正男二五 女三九

2モミヂ 同 男五九 女五 2 二同 同 男三六 女二四

3ミヅ 同 男二四 女一九 3 三同 同 男一五 女一一

4デンシヤ同 男一一 女四 4 四同 同 男七 女四

5コドモ 同 男五五 女三九 5 同 同 男二

五歳兒調査

一、調査人員 男四 女八 計一二

一、不正者數 同 四 同 六 計一〇

一、佳良者數 同 〇 同 二 同 二

一、問題別ニヨル調査 一、不正程度調査

1カラダ 不正男九 女九 1 一語 不正男二〇 女二〇

2モミジ 同 男一〇 女一 2 二同 同 男二〇 女二〇

3ミヅ 同 男三一 女三 3 三同 同 男二四 女二四

4デンシヤ同 男〇〇 女〇 4 四同 同 男〇〇 女〇〇

5コドモ 同 男三五 女五 5 五同 同 男〇〇 女〇〇

六歳兒調査

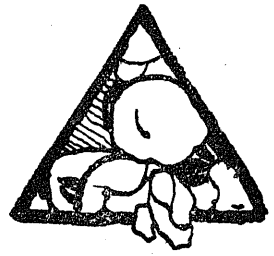
一、調査人員	男四九
一、不正者數	同四四
一、佳良者數	同五
一、問題別ニヨル調査	
1カラダ 不正	男三八 女四〇
2モミヂ 同	男三六 女三
3ミヅ 同	男一六 女九
4デンシヤ 同	男一八 女一
5コドモ 同	男二八 女二〇

七歳兒調査

女四六	計九五	一、調査人員	男四一
同四二	同八六	一、不正者數	男三五
同四	同九	一、佳良者數	男六
一、不正程度調査		一、問題別ニヨル調査	
1 一語 不正	男一二 女二三	1 カラダ 不正	男三六 女三二
2 二同 同	男二〇 女一〇	2 モミチ 同	男一三 女一
3 三同 同	男五 女六	3 ミヅ 同	男七 女七
4 四同 同	男五 女三	4 デンシヤ 同	男三 女三
5 五同 同	男二 女〇	5 コドモ 同	男二二 女一六

女三七	計七八
女三三	計六八
女四	計一〇
一、不正程度調査	
1 一語 不正	男一三 女一四
2 二語 同	男一四 女一四
3 三語 同	男六 女三
4 四語 同	男二 女二
5 五語 同	男一〇 女一

一、不正程度調査	
1一語 不正	男一三 女一四
2二語 同	男四 女四
3三語 同	男六 女三
4四語 同	男二 女一
5五語 同	男一〇 女一



幼兒に聽
かせる噺

赤い瓶 青い瓶

東京女高師教諭 水谷 年 恵

お山の中の大きなお寺へ、或晩一人の泥棒がは
いりました。お寺には昔々から大切にしてある寶
物がありました。其の寶物と云ふのは、赤い瓶と
青い瓶で、二つとも蓋がしつかりしてあつて、中
に何が這入つてゐるか、誰も知つてゐる者はあり
ませんでした。泥棒は其の二つの瓶を見付け出し
て、

「此の中にはきつといふ物が一ぱい這入つてゐる
にちがひない。」

と思ひまして、二つの瓶を盗み出すことにしまし
た。

赤い瓶も青い瓶も大層大さいので、二つ一度に
盗み出すことは出来ません。それで先づ赤い方の
瓶を、えんやらやつと抱へあげて、えつちらおつ
ちら、お山の麓まで持つて來ました。お山の麓に
は石のお地藏様が、小さなお堂の中に頭巾をかぶ
つて杖を持つて立つていらつしやいます。泥棒は
其のお地藏様の前へ赤い瓶をやつこらさとおいて、
「お地藏様、も一度お寺まで行つて來ますから、
此の瓶をお預り下さい。ちやんと番をしてゐて
下さいよ。」

と言つて、又すたこらお山の中のお寺へ引返して

行きました。そして今度は青い方の瓶を盗み出し、これさえつちらおつちらお山の麓のお地藏様の前まで運んで来ました。

「お地藏様有難う。よへくをしてゐて下さいましたね。さあ赤い瓶に青い瓶、まんまと盗んだ二つの瓶、中にはどんないゝ物がいっつてゐるだらう。金かしら、銀かしら、それともダイヤモンドかしら。何にしても中の寶はみんな私のものだ。」

と嬉しがつて、先づ青い瓶に手をかけて、其の蓋をあけようとしてました。すると、泥棒の手が急に両方とも、ひどくしびれて動かなくなつてしまひました。

「あついた……………。おいいた……………。あゝいた。おいいた。」

と言つて、泥棒は泣出しました。するとお地藏様が、

「これ泥棒、なほしてやるから此處へお出で。」とおつしやいました。泥棒は喜んで、

「はいく。お地藏様、どうぞ直して下さいませ。」と言つてお地藏様のそばへ行きました。お地藏様は持つていらつしやる杖で泥棒の左の手をぼんぼん、右の手をぼんぼん、どちらも二度づつおたゝきになりました。さうすると、今までひどくしびれてゐた泥棒の手は、すぐ様なほつて元の通りの手になりました。泥棒は、

「有難うく。おかげで助かりました。青い瓶はひどい瓶だ。もうこりくだ。今度は赤い瓶をあけて見やう。」

と言つて、赤い瓶の蓋に手をかけました。そして「一二の三。」と力を入れて蓋を取らうとすると、又両方の手がびりくつとしびれてしまひました。前よりもつとくひどくしびれました。泥棒は「うーん、く。」となつて地べたへころがつて

しまひました。ころがりながら、

「お地藏様、もういたしませんかどうかも一度
なほして下さい。お地藏様、願ひです。お願
ひです。」

と言つて頼みました。お地藏様は可哀相に思つて、
「では一度だけなほしてやらう。」

とおつしやつて、泥棒の兩方の手を杖でおたゝき
になりました。

泥棒は手がなほると、一目散に逃出して何處か
へ行つてしまひました。泥棒がゐなくなると、赤
い瓶と青い瓶とは大きな聲を出して、

「あつはつは……………」

「あつはつは……………」

と笑ひました。お地藏様も、あつはつは……………」

とお笑ひになりました。赤い瓶が、

「青君、こんなひろくした處へ來ていゝ氣持だ
ね、どうだい、一つ駈つこでもしようぢやない

か。」

と言ふと、青い瓶が、

「それは面白い。さあしよう。だが審判官がゐな
くちやだめだ。」

赤「うまいことがある。お地藏様に頼まう。お
地藏様、どうか審判官になつて下さい。」

お地藏様もにこ／＼笑つて、

「よし／＼。わしが審判官になつてやる。では此
のお山の周りを廻りつこしてごらん。赤は右の
方へ駈け出すんだよ。青は左の方へお駈け。い
／＼かい。早く私のところへ歸つて來た方が勝だ
よ。」

赤・青「面白い／＼。さあはじめよう。」

地藏「よをーい、どん。」

ころ／＼／＼／＼、ころ／＼／＼／＼、お山の
麓を赤い瓶は右の方へ、青い瓶は左の方へころが
り出しました。赤もころ／＼／＼、青もころ／＼

く、青い瓶も一生懸命、赤い瓶も一生懸命、どちらも一生懸命で、ころくくく、ころくくくとお山の周りをころがつていきます。

あつちもころくく、こつちもころくく、ころくくくくころがつて、お山の後の方で出あひました。赤い瓶はこつちへころくくく、青い瓶はあつちへころくくく、ころくくくくと近よつて、ころくくびちゃんとおぶつかつてしまひました。其のぶつかりやうがあまりひどかつたので、お山がぐらくつとゆすぶれました。其の拍子に、お山の前の前ではお地藏様がたまげてころげておしまひになりました。お山の中の兎も狸も鹿も牛もびつくりして飛上つてしまひました。鳩も四十雀も七面鳥も目白も驚いて目をまはしてしまひました。

「あーつ、大地震だ、大地震だあーつ。」

「やーあ、大雷だ、雷が百も一ぺんに落ちたんだ

あーつ。」

「こはいようー。」「いやだようー。」

牛も鹿も狸も兎も「もうく、ひゆうく。」と泣き出してしまひました。鳩も四十雀も七面鳥も目白も「くうく、ちいく」とふるへ出してしまひました。其處へ狐がやつて来て、

「やあみんな泣いてるく。おいく、そんなに泣いてゐたつて仕方がないぢやあないか。今のは何だつたか、麓のお地藏様のところへ行つてきいて見ようよ。さあみんな来いく。」

と言つて先に立ちました。すると、兎も狸も鹿も牛も、鳩も四十雀も七面鳥も目白も、みんな元氣を出して狐の後からぞろくくつついて、麓のお地藏様のところへいきました。

お地藏様のところへ行つてみると、お地藏様は前の方へつんのめつてころがつていらつしやいます。みんなは、

「ひやあー。お地藏様がころんでいらつしやる。さあみんなで起してあげよう。」

と言つて、「よいとこせつ。」とお地藏様を起して、

「お地藏様、お怪我はございませんか。」

とうかゞつて見ました。泥だらけの顔をしてお地

藏様は、

「みんなよう来てくれた。やれ／＼ひどい目にあった。どこにも怪我はしないが、頬べたも鼻の

先もいたい／＼。」

狐「それは／＼お可哀相に。ところでお地藏様さつきとえらい音がしましたが、あれは一體何でございますか。」

地藏「あれかね、あれは赤い瓶と青い瓶が此のお山を廻りつこして、びちやんとぶつかつた音だよ。」

これをきいて、兎も狸も鹿も牛も、鳩も四十雀も七面鳥も目白も二度びつくりしてしまひました。

なせかといふと、赤い瓶と青い瓶はお山のお寺の大じの大じの寶物で、一寸でもさはつたらすぐばちのあたる瓶だからです。

狐「あの赤い瓶と青い瓶にはお金が一ぱいはいつてゐるんだよ。」

兎「お金ちやあない。赤い瓶には赤鬼が這入つてゐて、青い瓶には青鬼が這入つてゐるんだよ。」

七面鳥「ちがふよ。赤い瓶の中には赤い小さい瓶が千も萬もはいつてゐるんだよ。それから青い瓶の中には青い小さい瓶が千も萬もはいつてゐるんだよ。」

牛「みんなうそだ、あの赤い瓶には赤いお酒、青い瓶には青いお酒がはつてゐるんだ。うまい／＼お酒で飲むと誰でも體が金になつてしまふんだせ。僕が飲めば金の牛になるんだ、狸君が飲めば金の狸になるんだ。お地藏様が召上れば

金のお地藏様になるのだよ。」

みんながめい／＼違つた事を言ひます。どれが本當だかわかりません。それでお地藏様が口を出し
た。

「みんなそんな事を言つてゐないで、お山の後の方へいつて赤い瓶と青い瓶がどんなになつてゐるか見て來たらいいぢやないか。」

とおつしやいました。みんなは、

「さうだ／＼、それがいい。」

虹の橋

野口雨情

あつちの町と

こつちの町と

太鼓橋たいこはしかけた。

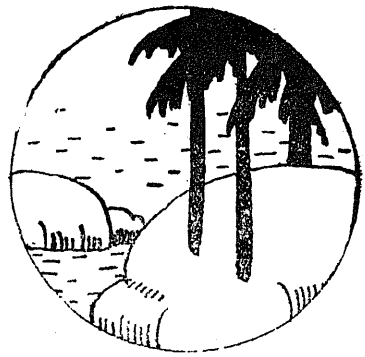
赤い草履ぞんぜはいて

みんなでわならう。

と言つて、又ぞろ／＼連立つてお山の後の方へ行きました。お山の後の方へ行つてさがして見ましたが、赤い瓶も青い瓶も見つかりません。お山の周りを一廻りしましたが影も形も見えません。ぐる／＼ぐる／＼何度も廻つてさがして見ましたけれども赤い瓶も青い瓶も何處へ行つたのかわかりませんでした。お地藏様にきいて見ても御存じない。さて赤い瓶と青い瓶はどうなつたのでせう。

あの子もわたれ
この子もわたれ
仲よくわたれ。

虹にじの橋高いぞ
手々ひいてわたれ



育兒叢談 (四)

第七 疾病と年齢との關係

時事新聞が婦人夏季講座に連載した醫學博士川上漸氏の講話であります。直接育兒のみに關係してゐるものではありませんが母としても保姆としても心得た方がよいことが多いから轉載いたします。

年齢と疾病と云ふものは、非常に深い關係を以て居るものであります、どなたも御承知のやうに大人になつてから麻疹になると云ふ者は極稀であります、又其反對に子供が胃癌に罹ると言ふ事は絶無であります、是は極端な例でありますが、兎も角、この年齢と疾病と云ふものは、極めて深い關係を以て居て其の關係の色々複雑した姿で吾々の眼に映て來るものであります、有様は複雑でありますが、併し其の關係を支配して居るものは極めて簡單であります、それは一つは境遇の差異、言ひ換へれば曝露の状態、即ち人間の社會に曝されて居る状態に依つて支配される。一つは遺傳の關係であります。此の遺傳の關係に依つて又色々支配せらるゝものであります、各の例を擧げて見ると麻疹の事は前に申上げた通りでありますが、此の麻疹でも金持の子供は小學校に入るやうになつてから初めて罹る、其の反對即ち金持たずであります、此の金持たずの子供は、五歳に達せぬ内に

麻疹に罹る事が多いのであります、是は金持の子供と金持たずの子供との體質が違ふと云ふよりも暴露の状態が違ふからであります、申す迄もない事ではありますが、吾々金持たずの子供と云ふものは、三歳位の頃から既に社會的位置に置かるゝのであります、金持の子供は小學校に通ふ頃或は幼稚園に通ふ頃になつて初めて「社會的」の地位に置かるゝからであります、即ち乳母、子守其他が守り立てゝ綺麗なお座敷からお座敷へ移り、別

差異が現はるゝのでなくして、暴露の状態が違ふからであります、多くの女の人は嫁に行く前に、一稼ぎしやうと云ふので十五歳頃から會社に出て働くのであります、それで二十歳を過ればそれぞれ良縁を求めて、社會の表面から隠れるのであります、それから男は兵隊検査が済むと、自分の身體の位置が定まるから、偕て之から一稼ぎやうかと云ふので稼ぎ出す、是は暴露の状態の違ふ一例であります。

壽命や疾病が女は女親に

男は男親に似る不思議

それから遺傳の關係の例を挙げれば一番簡単なる事から申しますと男でも女でも五十近くになると自分の死ぬる時期の心配を始める「私はもう長い事はなからうと思ひます」と斯う言ひ出す、何故かと其の理由を訊くと「親の死んだ歳が近づいたから長いことはなからうと思ひます」と斯う言ふも違ふが、その體質の相違に依つて、これだけの

それから遺傳の關係の例を挙げれば一番簡単なる事から申しますと男でも女でも五十近くになると自分の死ぬる時期の心配を始める「私はもう長い事はなからうと思ひます」と斯う言ひ出す、何故かと其の理由を訊くと「親の死んだ歳が近づいたから長いことはなからうと思ひます」と斯う言ふ

試みに親とは何を意味するやさう云ふ眞面目な質問を發する事は出来ぬが「貴下の親とはどちらであるか」と云ふ事を尋ねると、女は女の親を言ひ男は自分の父親の事を申して居ります、男が五十位になると「親爺が五十二で死んだからも二年位のものだらう」と斯う言つて居る、又女の方は「私の母親は六十歳で死んだから、私も五十八だからもう二年もしたら死ぬだらう」等と言つて居る、又多くの場合に、男女は其の通り親の死年に死ぬのであります、此の不思議な現象は何うして現はるかかと云ふと、父親が色々曝露の状態に依つて或る病氣を得ると、其病は其の年齢と一定の約束があつて、現はれて來るのであつて、其年齢に對して好みがあつて、同じやうな病に罹るのは何故なりやと云へば、是は病が年齢の外に更に性に性を好むからで、母親のかゝつた病は、其の母親の年齢と、性を好むからで、男親に起る場合も同じ事で

あります、併し茲に一つ不思議な事實は、男女共青春期の前に罹つた病、詰り物の衰れを覺へる前に罹つた病は、この男女の性の關係を有せず、子供に遺傳するが、春期發動期を過ぎてから罹つた病は、自分と同性の子供にのみ傳はるものであります、是は理屈を考へると興味がありますが、詰り物の衰れを感ずる年頃迄は、女でも男でもない云ふやうな譯からして、其の病は性と云ふ事に就いて好みながら、何方でも遺傳するが、春期發動期を過ぎてから起つた病は年齢の外に性と云ふ好みがあるから、同性の者にのみ病が傳はるのであります、斯う云ふやうな關係が絡み合つて、年齢と疾病との關係をして愈々複雑ならしむるのであります、但し是は年齢と疾病との關係の一つの方面であつて、他の方面から觀察するとも少し恐ろしい事がある、其の恐ろしき方面とは何であるかと云ふと文明の影響である。

偕て文明と云ふものは有難いもので、吾々は其の惠澤に均霑して今日愉快に日月を送迎して居るのでありますが、併し一面から観ると恐ろしいものである、それは文明の目的とする所は、多くの人と樂しみを共にすると云ふ事が其の一つであります、其の結果として、野蠻未開の時代に於ては、身體の虛弱にして勇氣の乏しい者は競争に依つて食物を得る事は出来なかつたのでありますが文明の時代に於ては、身體は薄弱で、勇氣に乏しい人であつても、なほ食物を得る事が出来る、それから、も一つは野蠻未開の時代に於ては、虛弱にして勇氣に乏しい者は、配遇者を得る事が出来なかつたのであります、従つて此の世に自分の子孫を残す事が出来なかつたのでありますが、文明の今日に於ては、此の虛弱にして勇氣に乏しい者にあつても、尙ほ配偶者を得る事が出来る、随つて此の世に子孫を残すべき機會が與へられるので

あります、之が爲めに、曾ては虛弱の體質と云ふものは、後の子孫に遺傳されなかつたのであります、文明の今日に於ては、虛弱の體質や、勇氣に乏しい性質が其の儘子孫に遺傳されるのであります、此に於て、吾々の社會に不思議な人間が殖えて行くのである、不思議な人間と云へば、言葉が悪いかも知れませんが、吾々病理學を研究する者は、之を「連れて行く人間」と云つて居りますが、詰り社會に一日一日働いて行く時に引つ張つて扶けつゝ進まねばならぬ、人間の數が殖えて來るのであります、斯う云ふ人は病に罹り易く、さうして罹つた病は子孫に遺傳する、此に於て年齢との關係は愈々複雑になつて來るのであります、併し私は此處で年齢と疾病との關係を一々年を追ふて病理學上から、専門的にお話する事は非常に面倒であつて、而も何等の効果も無い事だと思ひますので、今迄私は年齢と疾病との關係の大綱を

申上げましたが、是から先は、極端の場合を申上げやうと思ひます、それは人間は何故早死するか何故天壽を完うする事が出来ないか、即ち何故天から授かつた所の年齢に達せずして死ぬるのであらうか、其の天壽を全うする事の出来ない原因たる疾病は、抑も如何なるものであるかと云ふ事を申した方が都合が宜いと思ひます、今日迄人間の壽命は或は六十だと稱せられ、或は七十は稀だと稱せられ、普通は五十であらうと云ふやうな事を言つて居り、人生七十古來稀なり、七十迄も生きれば喜ばしいと言つて居る。

天壽を妨げる老衰といふ現象

コレステリン沈着のため

併し色々歴史を調べ尙ほ古代人種の材料を蒐めて調べて見ると、天壽と云ふものは百二十乃至百五十歳であるらしいのであります、さうして、其の天壽を全うしたる死と云ふものは、極めて安樂

であるらしい、即ち無慾にして安樂で、恰も木の葉が枯れて散るが如く、或は夏だけに生きて居る所の動物が、何等の不安なく、何等の慾望もなく死んで行くが如き状態であるらしい、天壽を全うせぬ死と云ふものは、凡て苦しいものであつて又若い者の臨終の有様程苦しさうに見え、悲惨なものであります、此の天壽を全うせずして死ぬる状態から、人類を救ひ出すと云ふ事が、吾々醫學に携はる者の最終目的でありますが、此の天壽を全うする事を妨げるものは何であるかと云へば、老衰と云ふ状態である、老衰とは抑も如何なる事であるかと云へば、是は極めて複雑のものであります、先づ皮膚に皺が寄つて来る、眼の角膜に白い曇りが出来て来る、是は上と下とから始まつて終には輪になるのであります、それから角膜の奥にあるレンズに濁りが出来て来る、老人になつて眼の清らかさを減ずるのは之が爲めであります、

それから肺氣腫と云ふものが起つて来る、よく爺さんや婆さんは朝起きてから、非常に苦しさうにゴホンゴホンと咳嗽を續ける様にするものであります。まして「私は痰性であります」等と言つて遠慮なく痰唾を吐き廻し、咳嗽拂ひをして居る者がありますが、之が肺氣腫である、それから動脈硬化症と云ふものが起つて来る、詰り動脈が硬くなるのであつて、醫者が脈を執つて見ると、恰度針金のやうな感じがする位迄硬くなるのであります、それから額の兩側に螺旋のやうな形をした血管が見えるやうになつて来る、是が動脈硬化症であります、是等の變化は一々別のものゝやうに見えるが實は一つの變化である、一つの病的變化が色々の姿となつて、吾々の眼に映るのであります、何故さう云ふ變化が共通であるかと云ふと、是は「コレステリン」と云ふ妙なものが、身體の組織の内に沈着して、其の量が増すに従つて、動脈纖維が切

れて行くと云ふ一つの變化が色々の所に現はれるから、別々のやうに見えるのであります、凡て皮膚に皺が寄つて居るのは「コレステリン」が澤山沈着して皮膚に緊張味を興ふる所の動脈纖維が追々切れて行くからであります、それから肺氣腫の起る所以は肺臓の組織の中に「コレステリン」が沈着して、其の量が増すに従つて動脈纖維が切れるからであつて、凡て一つの變化であるが、同一種の變化が、その現はるゝ所に依つて色々の姿を示すに過ぎないのであります、此の時血液を調べて見ると血の中に多量の「コレステリン」が含まれて居て色々のところに行つて付くのであります。

それならば此の「コレステリン」と云ふ厄介なものが、吾々の身體の中に現はれて來なくとも宜さうなものであると思はれますが、實はさうでないのであります、其の證據には、吾々の生れ出

づる前、即ち人類として最も若い胎兒の血液の中には、多量にこの「コレステリン」が含まれて居る、即ち「コレステリン」がなければ、吾々は胎兒の状態から一人前の人間になれなかつたのであります、この「コレステリン」は何う云ふ働きをするかと云ふと、細胞の分裂増殖を助けるもので、吾々はこの「コレステリン」のあることに依つて生息して來たものであります、老年になつて、老衰状態を呈するのは體內に澤山ある、この「コレステリン」を充分に消費することが出來ないからであります、故に胎兒の時代や、子供の時代から老衰に至るまでの血液を計つて見ると、壯年の時代に於ては、血液の「コレステリン」は非常に少いが、高齢になるに従つてふえて來ます、それで吾々は動物實驗によつて、人工的に老衰の状態を起すことが出來ます、例へば色々の動物の腦髓とか鶏の卵の中には「コレステリン」が非常

に多いものですが、此「コレステリン」を動物には食はせますと、ある動物にあつては容易に老衰の状態を現はして來る、例へば兎の子一日に鶏卵三つ位づゝ食はせますと、二ヶ月位を経て彼等がまだ成熟期に達せぬ前に、既に老衰状態が現はれ角膜は濁り、動脈硬化症が起り、内臓の動脈纖維の弾力が減つて、明かに老衰の状態を起し家るのであります、こゝで後に述べる事柄の爲めに一言挟んで置く必要がある事は、此の兎に於ては人工的に老衰状態を起す事が割合に樂ですが、他の雜食動物及肉食動物にあつては之が困難である事です、例へば犬は本來は肉食獸であつたと云ひますが、今日吾々の家に養はれて居る犬は雜食獸であります、此の犬に老衰状態を人工的に起す爲めには、例へ一日に鶏卵五十箇位を喰はせねば起つて來ない、即ち雜食動物や、肉食動物は人工的の老衰状態を起すことが困難である。

内外に働く内分泌腺の秘密

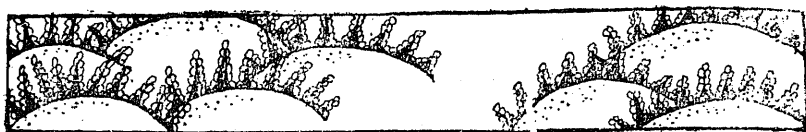
一體吾々の身體の中には腺と云ふものがある、是は肉の中にある所の泉でありまして、この腺は血液の中から材料を取入れ、細胞の働に依つて血液とは全く異なる物を造り出して、之を材料を取り入れた方向と、別の方向に出す働をもつて居るものであります、例へば吾々が汗をかき、或は唾を出す、それから尙は見えない所でもあります、腎臓の働きに依つて血液を材料として、小便を造る、それから矢張りこの血液を材料として、肝臓が胆汁を造りますが、是等は凡て腺の働である、仍で腺と云ふものは一般に云へば造り出した物を、身體の外に送り出すものである、こゝに身體の外と云ふのは、吾々醫學を攻究する者から言ふと、胃の内部表面も、又腸の衣面も、吾々は之を體表と云ふのであります、何故なれば、吾々の身體を極く簡単に考へると、上に一つ口があつて、下の方

に一つ口がある一つの筒のやうなもので、外に色んなものが附いて居りますが、それは身體を貫いたものではないのであります、此の管の内面も之を體表と云ふのであつて、腺はその造り出す働きをするものです、併しこの造つた物を體表に送り出さぬ特別の腺がある、之を吾々は内分泌腺と云ひますが、その造つた物を血液、若くは淋巴腺の中に送り出すと云ふ構造をもつた、或はさう云ふ働きもつた腺があるのであります、この内分泌腺の容易く判るものは、甲狀腺と云つて咽喉の所にある腺、それから副腎と云つて腎臓の上に烏帽子の樣になつて載つて居る腺なぞで、又腺には内外二つの働きを以て居るものもあります、例へば胃の腑の下に潜んで居る所の腎臓、婦人の骨盤の中にある卵巢、それから男子の睪丸等で、是等は何れも内外二つの働きをもつて居る所の腺であります、そしてこの内分泌腺は、互に深い密接の

關係をもつて居つて、相互に働きを妨げ合ひ、或は助け合つて居る腺でありまして、之に依つて全身の新陳代謝を調節して居るのであります。

その調節の状態を人工的に壞して見ると、其働きが明かに見えて来る事が屢々あるのであります例へば吾々は生殖の時期に達する前には、胸に胸腺と云ふものがあるのですが、此の胸腺は生殖の働きを妨げて居るものでありまして、男子にあつては睪丸の働きを妨げて居り、女子にあつては卵巢の働きを妨げて居るものであります。仍で動物に就て見ますと、彼等のまだ生殖期に達せぬ前に手術に依つて胸腺を早く取つてしまふと、さうすると鶏にありましては、まだ若い中に鶏冠が生え、時を告げるやうになつて來て、物の衰れを覺ゆる傾きがある、それから又支那に昔宦官と云ふものがあつた相ですが、是は幼少の時代に睪丸を全部取去るか、或は其の出口を塞いでしまふ、さ

うすると何時迄たつても物の衰れを感せずして過ぐすので、是は睪丸の働きがないからでありますそれから胸腺が二十歳を過ぎてても尙ほ残つて居る人があるが、さう云ふ人を解剖して見ると、生殖腺が幼稚の状態にある、世間によくかつぶくの良い女の人で、而も石女の人があります、さう云ふ人を見ると、明かに胸腺が残つて居るのであります、斯う云ふやうな譯で、内分泌腺と云ふものは互に深い關係を保つて、さうして全身の新陳代謝を調節して居るものであります、仍で話は本道に戻りますが、老衰の状態は、先づ血液の中に「コレステリン」が多量に現はれて来るやうになると睪丸組織が變化し、其の働きが衰へて來るのであります、又婦人にありましてはその卵巢の組織に變化が起つて感能の衰へたる状態が見えて來るのであります。(未完)



地から湧いた幸福 (一)

金子彦二郎

一

「佐渡へ佐渡へと草木もなびく

佐渡は居よいか住みよいか。」

とうたはれてゐる緑の佐渡が島に一番近いのは、越後の國の間瀬といふ漁村であります。この間瀬村に、今でも「間瀬の孫九郎、でんでの稼ぎ」といふ諺めたいものによつて其の名を傳へられてゐる孫九郎といふた漁師が、ずつと以前に住んでゐました。孫九郎は若い時から至極人の好い、さうして鯛釣にかけては村一番といふ腕利きでしたので、村人から恵比須の孫九郎くと、綽名されて敬愛されてゐました。

二

孫九郎は今年六十歳になりました。しかしまだく元氣なもので、釣竿を持つては誰にも引け取らないので、一人息子の孫一と共に家業にいそしんでゐました。



所が或日のこと、ふとした用事で寺のお坊さんを尋ねて行きました。要談が済んでからお茶をいたゞいて四方山の話などしてゐるうちに、彼の目は坊さんの机の上に廣げてある面白さうな繪本の上に移りました。

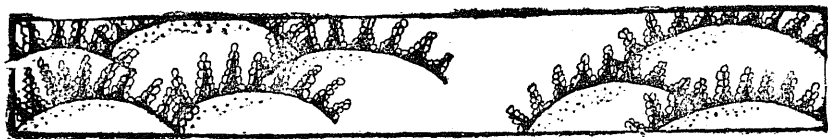
「それは何でございます。面白さうな繪が書いてあるではございませんか。」と尋ねると、お坊さんはに／＼しながら、

「はあ、これは往生要集といつてね、此の世で作つた善業・惡業がそれぞれ來世で報いられるものだから、せい／＼此の世にゐるうちに善い行をしたり、佛信心をしたりして、立派な極樂往生の遂げられるやうに心掛けるがい／＼といふことを教へ諭したもののさ。」

と言ひました。

「どれ、私にも見せて下さい。」

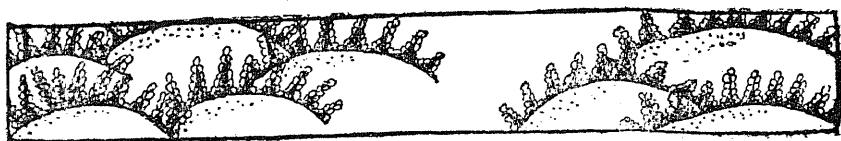
と言つて受取つて膝の上に廣げて見て行くと、そこにはさまざまに珍しい地獄極樂の體相が寫してありました。血の池地獄であぶ／＼藻掻いてゐる亡者もあれば、劔の山に追ひあげられて泣き喚いてゐる者もありました。どの一枚一枚にも新奇と驚異との腫をかゞやかして眺め耽つてゐた孫九郎は、併し、商賣柄として、瘡せ衰へた一人の亡者が、



鋼鐵製かとも思はれるやうな眞黒な鋭い嘴を持つた魚族どもの爲に、胸や肩先や二の胸などの肉^しむらを啄み取られて苦しみ悶へてゐるむごたらしい圖に最も深い印象を焼きつけられました。而もそれが娑婆で慰み半分に魚族を殺生した者達が、一寸だめし五分だめしの苛責を受けてゐるのだと聞かされた時には、「いや、自分の殺生は身すぎの爲で、慰み半分でする殺生ぢやないから罰も咎もない筈だ。」と強く打消しては見たものの、心の奥にこびりついてしまつた罪深さの烙印だけはどうしても拭ひ去ることが出来なかつた。

三

善人の孫九郎は其の日以来、身すぎの爲の生業とは言ひながら、つくづく我が身の携つてゐる殺生を事とする漁師といふ職業がむごたらしい仕事であることに氣がついたらすつかり厭になつてしまひました。それでその日からといふものは、沖に出るすなどりの事は一切息子の孫一に任せつきりにして、自分はひたすらこれまでの罪滅しの爲と、亡き妻の冥福を祈ることに餘念ありませんでした。何仕事に携つてゐる時でも、孫九郎の口から「南無阿彌陀佛々々々々々」といふ信心深い念佛の聲の絶える時がありませんでした。お寺の坊さんの法話も洩らさずに聞きにまゐりました。その法話の中でも、



上方にある本山の構への壯麗宏大なこと、生佛と稱せられてゐる御門跡様の法話に隨喜する時には、どんな極重惡人でも、忽ちに攝取不捨の大悲の御手に縋らせて貰へるといふことなどが、殊更に孫九郎の心魂に深く喰ひ入つたのであります。

それで孫九郎はたうとう、生きた一生には、是非とも一度は其の御本山に詣つて生佛様を拜まなければならぬ。幸ひ自分はもう隱居で、別段忙しいからでもないから。」といふ殊勝な大願を起しました。而も其の雜用や御養錢などには、一切魚族を殺生することによつて得たお金を使ふことはしまい。勿論現に漁師をさせておく忤の孫一からなんぞ鑑一文も合力は願ふまい。細いながらもどこまでも自分相應な努力の汗と膏から稼ぎためた清淨なお錢で用を辨することにしようと思ひました。

さう決心がついからの孫九郎の精進生活は、草鞋を作ることとなつて表はれました。大きな貯金函を拵へておいて、朝も晝も晩もひたすら念佛を唱へながら作つた草鞋の賣代を投げ込むことにしました。

四

信仰心に燃える人の精進ほど熱烈なものはありません。孫九郎の精進ぶりは、時々父の健康をいたはる息子から「お父さんのやうに根をつめては身體がたまりますまい。上



方参りの雑用ぐらゐる私が才覺してあげますから、もつと氣樂に仕事をしてゐて下さい。」と涙ながらに諫めてくれるほど眞剣なものでありました。

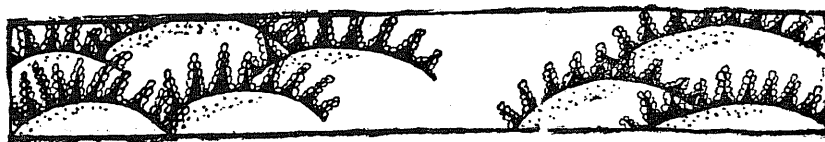
「なに、大丈夫だよ。佛様と二人がゝりで仕事してゐるのだから、疲れるの、弱るのといふことはありはしないよ。私にはこれが樂しみでたまらないのだから。」

これが何時も孫一に答へられる言葉でありました。にこ／＼顔の孫九郎は、自分の健康を氣遣つてくれる我が子の顔をばいとはしむやうな慈悲の眼ざしで打見やりながら、右のやうに答へては、草鞋作る手を動かすのでありました。

五

都からは霞をへだてた遠い鄙路にも櫻の花が咲きます。紅い椿も綻びます。其の櫻が咲いては散り、紅い椿が散つては綻びる春が、いつの間にか三度まで繰返されてゐました。貯金函はもう持ち上げられぬ程に重さを孕みました。

ある日孫九郎はお佛壇にお燈明をあげて、恭しく禮拜した後で、其の貯金函を開いて見ました。底のない柄杓でも、千遍萬遍水を汲みとる時には、笹の露ほどもない其の一しづくづゝが積り積つて大きな桶さへ満たすとやら。況してこれは一念發起した孫九郎の精進格勤、どうして美果が報いられずにあられようか。ざら／＼と鳴つて溢れ出



た夥しいお鳥目は、もとより豫期してゐた孫九郎自身さへびつくりするほどでありました。それをお金に換へたら十何兩といふ大判小判になりました。孫九郎は恭しく押戴いて、本山參詣の素懷を遂げ得る吉日がいよく、到來したことを感謝せずにはゐられませんでした。

六

「六十三の老人を、海山何百里隔てた上方まで一人旅させるのが如何にも心もとないから。」と例の孝心深い孫一が何とかして思ひ止まらせようとすると、「いやどうかこればかりは止め立てしてくれるな。佛様のお爲なら、御本山參詣の爲になら、たとへ此の身は途中で虎狼の餌食にならうとも後悔はしないのだから。」といふ父の熱心さに、たうとう根負けして、孫一も今度は積極的に支度萬端手ぬかりのないやうに心を配り、いよく鹿島立の朝には親一人、子一人の悲しさ、水盃をして村端れまで見送つたのであります。

境川にかゝつた土橋の上で、假初とは思へど親子が恩愛の袂を別つとき、

「では父上、道中御無事で御念願を果され、一日もお早くお歸り下さい……」
といふ孫一の腫が曇れば、

「あゝ、どうぞお前も身體を大切にしてくよく留守居をしてゐておくれ。よいお土産を



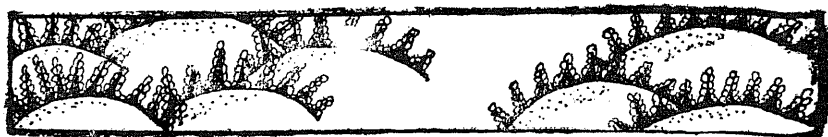
「たとと買つて来てやるから。」

と幼い子供でもあやすやうに言つた父の睫にも、小さなしづくが眞珠のやうに光つてゐました。

七

こゝは名にし負ふ花の都、眞宗の大本山の御寶前であります。天空に聳える大伽藍の薨、堂内に眩いばかりの御内陣の金色燦爛が照り輝き、黄金や七寶を鏤めた金具に映える御燈明の光、空中に飛ぶ城さへも香に咽せるだらうと思はれる焚香の煙、全くそれらは紫の靄のたなびく四方十萬億土の極樂淨土の光明世界をそのまゝ摸し出したものとしか思はれません。掌を合せて稽首參拜祈念する人、をろがみ終へて伽藍の輪奐に懺歎の吐息を投げかけてゐるもの、下向の道すがら負うた兒を喜ばすべく、足下に集ふ人馴れつこい鳩の群に豆を施してゐるもの、さしもに廣い境内も肩擦るばかりの雑沓です。

本堂正面の階段のもとに、この偉大さ、莊嚴さ、華麗さ、參詣人の夥しさに酔うたやうに立ちすくんでゐる一人の田舎親爺の姿が見出されます。それはとりも直さず遙々と越後路から上つて來た孫九郎であります。孫九郎は人波にもまれておどろしなながらやつとの事で正面階段のもとのお賽錢函の前に身を容れる餘地を見出したのです。入れ代

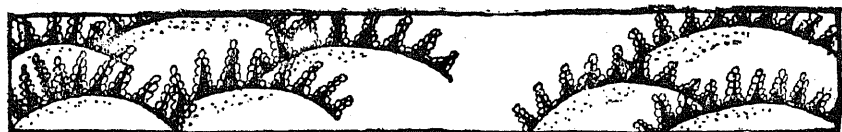


り立ち代る人々に揉まれながら、彼は年來の希望の叶つた嬉しさに、殆ど我を忘れて信念深く掌を合せて祈念をこめました。彼はもう此のまゝ極樂淨土へ召されてもよいと思ふ程の法悦にひたつてゐました。

しばらくしてやつと目を開き、垂れた頭を擡げた孫九郎は、懷の皮財布を取出してお賽錢の喜捨に取りかかりました。ガラ／＼と財布のお錢を掌のひらに移して、どれだけ上げたものかと思案してゐる時、後の方から詰めかけた參詣人からどんと小突かれた拍子に孫九郎の掌からは二三枚の小判がキラリと輝いて賽錢匱の格子の間へ迂り落ちました。孫九郎は

「あつ！」

と思はず呻き聲を立てました。が、もうそれは後の祭でどうして見ようもありませんでした。手を入れて取出すことはもとより、寺の世話方に頼んで取出して貰ふことも出来るものでもありません。孫九郎の顔には「この大切な三兩といふ大金を落してしまつては、もう歸國の旅費がない。」といふ前途の不安から、さつと當惑の色が閃めきました。が、併しもう一生の思を果してこのまゝ極樂淨土に召されてもとさへ歡喜してゐた孫九郎のことですから、すぐさま氣を取り直して、



「なに、これも救世の教主へのお初穂だ。我ながら思はずもよいことをしたものだ。」と思ひあきらめて、財布を懷に仕舞ひ込むと、再び瞑目合掌して感恩報謝の爲に阿彌陀如來の御名を唱へるのであります。

八

み佛以外に誰知るものもあるまいと思はれる此の孫九郎の仕草をば、目も放さずに見守つて、ほつと溜息を洩して感歎し、さて満面の相好をとろかして會心の笑を湛へてゐる氣品の高い婦人がありました。

この婦人はよほど大家の奥方と見えて二人の腰元を従へて、今しも内陣での參詣をすまして正面の階段を下りかけてゐたのであります。丁度其の時眼前に孫九郎の過失に原因した大枚三兩の喜捨を目撃して驚歎の眼を瞪ると共に、「見なりこそ田舎じみて居てはゐるが、三兩のお賽錢を喜捨してニコ／＼してゐる所を見ると、あの御老人はきつとどこかの千萬長者に違ひない。この日本一のお金持と言はれる私でさへ一兩の寄進を素晴らしいものと思つてゐるのに、何といふ思ひきつた御寄進振りだらう。これも佛様のお引合せといふもの、娘をかたづけぬなら、あゝいふ千萬長者でなくてはならぬ。さうだ早速話しかけて見よう。」とかう思つた時に、包みきれぬ會心の微笑が頬に崩れたのであります。

幼　な　ぐ　ふ

東京女高師教授

臥

雲

○
弟八歳おねいさん。僕はゆふべ、植物園にいつた夢を見たよ、そしてね、植物園のお茶店に世界はどの土瓶がかかつて居たのよ。

姉十二歳マアほんとうに、あなたは、いつでも、そんな變な事をいふのね。世界でいま歩いて居ることも世界よ。一たいどんな大きさいふのよ、そんなもの、お茶屋にかかつて居るなんてマア。それは、或日友だちが、地球儀のおもちやの大きなのを持つて來て見せた時これ、何にといふと、世界だといつたので、其地球儀程の大きさの土瓶といふことだつたのである。

○

あこちやんが安全ピンを持つてゐる、「これ安全なピンといふことよ」といつたから、「安全」といふこととおわかりですかと聞くと、暫くあこちやんが考へて、「戦争にいつてたまのあたらないのを安全といふのよ。」

○
亡母の遺骨を（震災の爲慘死）染井の墓地に埋葬して歸つた夕方、姉（十一歳）「もうこれでおかあさんには一生あへないのね」

弟「おねいさん無線電話でもだめかしら。」（この問答をきいて思はず泣き伏した）

○
あこちやんをつれて御墓参りをした。墓地につくとすぐあこちやんが「ああ。おかあさんは、石になつておしまひになつた。」

○
「お彼岸に御墓参りをしませう」といつて、姉妹三人をつれてゆきがけに、風邪でねてゐたあこちやんに「おかあさんの御墓に参つて來ますよ」といふと、

あこちやんが床から起きて出て來て「ああ染井の乞食におかねをやつて頂戴」といつて、一錢銅貨一つお小遣の赤い袋の中から出した。

「ハイ／＼どんな乞食にやりませうか」

あこちやん暫く考へて、大人の乞食にやつて頂戴

「アラ子供の方がかあいそうじやありませんか」

あこちゃん「いや子供はやたらに使ふといけないから大人ならお米なんぞ買ふでせうから。」

○

日曜日に部屋の掃除をしてゐると、姉（八歳の時）一寸のぞいてすぐ行つてしまった。しかも自分の机の上を片つけられて居るのを見て。

暫くたつてきれいに掃除済になつてから入つて來た。

「アラ

さつきだまつてあちらに入らしたのはお掃除の手傳をするのがいやだからでせう」といふと、

「オヤ

ばけのかはをあらはされた」といふ。

「どうしてそんなことがわかるのでせう」といふから「化の皮をあらはすことがわかつて居なければなく、人をよくしてあげられないのよ」

「ソーを」といつた其翌年、或學校の時間割を見て心理とかいてあるのを見て、

「これ何に」といふ。「それをならふとよく化の皮をあらはされるのよ」といふと

「アアはやく私も心理がならいたいなあ」

『兼ちゃん』

東京女子高等師範學校教授 岡田 美津

(八) 赤い總もみ

「兼ちゃん、玄關へ驅けてゝッて、誰だか見ておいで。」と母親は土曜の晝食を一口二口づゝ千代ちゃんに食べさせながら言つた。

お薯いもを半分口に頬張りながら、兼公は、椅子から下り降りて、玄關へ出ていつた。

「もしかしたら大鳥のおかみさんかも知れない。」とお芳は夫に話しかけた。

「何の用があるんだ。」と吉藏は尋ねた。かれは椅子にのけ反つて、屈託のない顔をして、一本のマツチ棒を何のあてもなく小楊枝に削つてゐた。

「昨日きのう貸した品物を返しに來たのかと思つたのさ。」

「どんなものを。」

「話さなかつたかね。あのね、大鳥の宅で昨晚ゆうべ御客をするんで青い花瓶を二つと、黄色い鸚鵡のついてる海老茶椅子被ひと、陶器のバルク入れとその他二品しな三品しな貸してく

れといったのだよ。」

「どうも厚顔^{あつか}ましいな。」

「だつて可哀さうに、あすこの家には、あんまり道具が無くて、それでゐてお客をするのが、それあゝ好きなんだから。」

「それちや、おれ達もそこへ招んだらいいぢやないか。」と吉藏は人が好さうに笑つた。

「お前さん、何遍招ばれたつて行きさうもないくせに。……兼坊はなせに手間取つてゐるんだらう……兼坊、何してるの。」

「今行くよ。」と息が塞^{つま}つたような聲がきこえた。

「さつさとおしな。……大鳥のおかみさんぢやなかつた。あの人、青い花瓶を壊はしてくれなけりやいゝが……おい兼坊、今誰^だが來たの。」

「郵便屋さん。」

「お前何してゐたの。」

「郵便屋の小父ちやんがお菓子くれたから食べてたの。お父ちやんに手紙が來たよ。」

「まあ、どうだらう。この子は郵便屋さんと仲が良いんだね。その大きな手紙は何な

の。」

「お前、何だと思ふ。」と吉藏はにや／＼しながら尋ねた。

「あたい知つてゐるよ。」と兼ちやんが引取つた。「あたい瞰いてみたもの。寫真だよ。」

「あら！ 寫真かい。」

「そうよ。」

「早くさ、お前さん、見せておくれよ。ほんとに、まあ私やもう來ないのかと思つてた。お前さん汚よごさないやうにね。そして兼公には手を洗つて來ないうちは觸いらしてはいけない。……千代ちゃん、お前のかわい／＼お寫真を見せたげやうね。……兼ちやん。きれいに食べてしまつて、手を洗つておいで……お前さんて不器用な人だね。……

……封が切れないの。」

「いやに急せぐちやねいか。」と吉藏は、その包を態わざとひねくりまはして焦心ちしながら、

「明けて口惜くしき玉手箱かも知れないせ。」

「お止としよ！ もう、寫真は上出來に定つてゐるさ。お前さんのむだ口は眞平だ。」

そこで吉藏が包みを開くと、中からキャビネ型の光澤寫真が六枚出て來た。吉藏は暫ちよ時眺めてからアハアハと大口を明いて笑ひ出した。





「お前さんは大きな子供ね。」とお芳はすこし焦心して「一枚私にお見せよ。」

「そらよ。全く滑稽だな。」

「あたいにも一枚。」と兼公がせがむ。

「そらお前にも、ハア！　どんなだね。」

兼公はやゝしばらく寫眞を眺めてゐたが落膽したやうな表情をして父親を見上げ。

「どうして、あたいの總ふさは赤くないの。」と問ひ訊した。

「吉藏は笑顔を止めて當惑さうな風をして。」

「赤くなるつて言つたぢやないか。」

「あゝ、赤く塗つてくれと寫眞屋に話してやるツていつたつけな。お父ちゃん、すっかり忘れちまつて。……だが立派な寫眞だらう。エ、兼坊。」

「總を赤くつていふのに、黒いんだもの。」と兼公は冷やかにいふ。

「ほんとにわるかつたなア……頼むの忘れて。……お芳、兼坊が文句いつてるのを聞いたかい。」

「何。」ときゝかへしたお芳は家族銘々の姿を嬉しさうに眺めては千代ちゃんに話してきかせてゐるのだつた。

「兼坊がね、帽子の總が赤くないつて、いやがつてるんだ。おれが寫眞屋にいふのを忘れたんでな。」

「却て丁度いゝぢやないか。寫眞の中で總が赤いのなんて變だもの。」

「だつて、あたいの總は赤いんだよ。」と兼公が言ひ張る。

「赤いがね。赤でも青でも黄色でもその他の^{ほか}の色でも寫眞には寫らないんだよ。」

「どうしてなの。」

「母ちゃんもそのわけは知らないの。寫眞に色を塗るのはよくないんだから。」

「どうして。」

「たゞよくないの……千代ちゃんお父ちゃんがわかるかい。え、坊や。」

お芳はまた寫眞の方へ氣を向けてしまつた。「あゝ、お父ちゃんが分つたね。偉い。」

「そいつはお父ちゃんよりも偉いや。」と吉藏はすこし^{しよび}悄氣で「おらにはそう見えねえんだ、その厄介なカラで息が填まりさうぢやないか。」

「なに、立派に見えるよ。このカラをさせてよかつたと私は思つてる。お前さん、すこし眞面目すぎるけれど、私は、男がふざけたやうな格恰をして寫眞に寫るのは好かないよ……丁度胃病が癒つたツていふ新聞の廣告になる寫眞のやうでね……アこれが



お前ちゃんは（千代ちゃんに向つて）……折角のいゝ寫眞をお汁の中へ入れてはいけませんよ。」

「ちつともいゝ寫眞ぢやないや。いやな、へば寫眞だ！」と怨みを抱きはぐゝんでゐる兼公は口を出した。

「そんな事いふもんぢやない。」と母親はたしなめた。

「いやな、へば寫眞だ！　ちつとも好きぢやないや。あたい……」

「シー、そんなくだらない事をいふもんぢやない。原田のお祖父さんはお喜ひなさるよ、ね、お父ちゃん。」

「喜こんでくれゝば結構だが。大體としてはわるくはないが……」

「あたいお祖父ちゃんに赤い總だつて言つたんだよ……だのに赤くないや。」と兼公がいふ。

「赤い總がなんだい。」と母親が笑ふ。

「おら實際弱つたな。」と父親は大眞面目で「總を赤く塗らせると兼坊に約束したのに。」

「だつて、今になつちや赤くならないんだから、それまでの話ぢやないか。」

「あたい、金子の初ちゃんに赤い總だつていつたら、初ちゃんが他の子達に話したんだもの。」と兼公はすこし聲を震はせた。

「赤いんだなんてたしかにきまるまで、他に言はなけれあいゝのに。」と母親がいふ。

「だつて、確だと思つたんだ。お父ちゃんが赤いツていつたもの。」

自然に出る怨みの言語に吉藏は面目なくてたゞ押し黙つてゐた。

「すこし戸外へいつて遊んでおいでよ。」と母親が勧めた。

「行きたくないや。」と子供は不平顔で答へた。

「母ちゃんのいふ事をきくもんだよ。千代ちゃんはお晝寝をするね。昨夜よく眠らなかつたし、今朝も寝なかつたから。お前も行つておいで、お茶のときにお菓子上げるから。だけど遠くへ行くんぢやないよ。」

「兼公は行きたくないのかも知れないせ。」と吉藏はやつとの事でそれだけ言つた。

「そんな事があつたら不思議なもんだ。いつて初ちゃんと遊んでおいで。」兼ちゃんは氣が進まないらしく出ていつた。

お芳は、眠りかけた子供を軽く叩きながら聲もちいさく、



「お前さー私が兼坊にあゝしろかうしろと言つてる時に口を出しちゃいけないよ。」

「それや、おれがわるかつた。だが、あいつに對して、おら、ほんとに氣の毒でな。

戸外へ出るのをあんなに厭がつて居たらう。」

「あの子は時々強情張るからね。」

「さうだがね、今のは強情ぢやない。あいつ、可哀さうに恥をかくのがいやなんだぜ。」

「恥をかく？」

「そうよ。かりに金子の初子だの他の奴らが寫眞の事をきくとしたらあいつ何ていふだらう。きつと赤い總で自分が寫つてるとか何とかいつてすこしや前に自慢したらうぢやないか。それが今……」

「何だよ、お前さん！ そんなに心配する程の大事件ぢやないやね。」

「あの子にや大事件さ。あいつ中々高慢だから、友達に寫眞のは赤い總でなかつたと言ふのは辛いンだぜ。」

「そんな自慢しないがいゝに。」

「だつてさ。」

「友達にそんな事話さないで置けばいい。」

「それがきつと話すんだ。友達が忘れずに尋ねれば、あいつ虚言はいはないから。」

「それあ、そうだね。」

「すると、友達があいつを笑つたりからかつたり、それがまあ、いつまで續くか分らない。」

「うちの子にからかつたりすれば、承知しないからいい。」とお芳はいきまいた。

「だめく、そんな事いつたつて。あいつが辛い目見るだけだ……それがおれのせいなんだ……みんなおれのせいなんだ。」

お芳は何も言はずに立ち上つて、千代坊を床に寝かして食事の後片付をし初めた。洗ひ物をすますと、お芳は吉藏がつまらなさうに煙草をふかしてゐる方へむいて

「あの總を今からでも赤くする工夫はないかしら。」といふと

「ほんとにそういふ氣かい。」と吉藏は立ち上つた。

「あ、あの子も喜ぶし、お前さんも喜ぶから。お前さん、自分で何とかならないの。」
「繪具がないもの。それに塗り方を知らなくちやこの上に色を塗るのはむづかしいかな。」と吉藏は寫眞をつくくと眺めてゐる。

「赤いものがすこしあればいいんだがな。」



「そうよ、すこしな……あ、うめい事考へた。」と吉藏は急に有頂天になつて叫んだ。

「静にく！ 坊やが居ますよ。何なの。」「當らないか。」「當らないね。」「

郵便切手さ。」と得々として、小聲で吉藏が答へた。

「ほんとに思ひつきだね！。」とお芳は感心して「私のお金入に切手が入つてゐる、原田のおかみさんに手紙を出さうと思つてゐたので。全くお前さん、考があるね。兼坊がさぞ嬉しいがるだらう。」「忽ち夫婦は寫眞を前にテーブルに就いた。

「お前は立派な女だな。」と吉藏がいふと

「何、くだらない事いふのさ。」とお芳は口でそいつても立腹の様子はしなかつた。

お芳が鋏を渡すと吉藏は手に持つてゐる切手から小部分を切り落した。

「よく氣を付けてよ……寫眞をいけなくすると困るから。」とお芳がつづやく。

「おれがうまくするよ。……しまつた、嘸みこんぢやつた！」

「もう一ヶ所きればいゝ。」

いはれる通りに吉藏はもう一ヶ所切りとつて、兼公の帽子の總のところへピタと貼り付けた。それから身を起こして自分の細工に感服して眺め入つた。

「どうだ、お芳。」「いゝね。」「あいつ悦ぶだらうな。」「悦ぶとも。」「

二人は笑み交した。

兼ちやんが歸つて來て見ると、父も母もにこつてゐるので自分もにこにこした。

「お前、初ちやんと遊んで來たのかい。」と父が晴々としてきくと

「あゝ。初ちやんだの他の子だのと鬼ごつこしたけれど一度も鬼にならなかつたよ。」
「お前赤い總のこと何もいはなかつたのかい。」と父は前掛の下に寫眞を隠してゐる母親と、こつこり目くばせをした。

「いつたよ。寫眞に總を赤くするのを止したツていつたの。黒い方が立派だからツて。」
「そうしたら、みんな何ていつたい。」と母親が尋ねた。

「みんな黒の方が立派だつていつた。富ちやんだけはいはなかつたから、鼻ンところをなぐつてやつたら、赤より黒の方がいゝつて言つた。」

吉藏はお芳に黙つてゐると手眞似で制して、

「兼公お前、帽子に赤い總のついた寫眞欲しくないか。」

「ちつとも欲しくないや。」と傲然として「あたゐ、もう、赤い總きらひだよ。」

吉藏とお芳は手持無沙汰に顔を見合せた。



一、
御入會 を希望いたします。

日本幼稚園協會に御入會下さい。毎月機關雜誌幼兒の教育を配布いたします。
またいろいろの便宜があります。

二、
御寄稿 を歓迎いたします。

幼稚園や托兒所の狀況なり、幼兒に關する研究調査なり、また童謠・童話なり、
苟も幼兒の教育に關する事項についての御寄稿を歓迎いたします。

三、
會費 は 前納に願ひます。

半ケ年分金貳圓拾錢、一ケ年分金四圓貳拾錢であります。

振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に御拂込み下さい。

告 稟

定 規 文 注

一、幼稚園及び小學校、家庭、育兒、看護等に關する論說
調査研究等の寄稿を歡迎いたします。
一、寄稿は一行二十六字詰に記して下さい。但改行は一字
下けること。また句讀點は一字あけること。
一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び寄贈の新
刊書、交換雜誌、入會手續、更に
本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切
左記編輯兼發行所宛に願ひます。

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内 日本幼稚園協會

一、本誌購讀御希望の方は日本幼稚園協會に御加入下さい
居所、氏名を明記し會費前金にて東京女子高等師範學校
附屬幼稚園内日本幼稚園協會に御申込下さい。
一、日本幼稚園協會會員外にて本誌御注文の方は凡て前金
(郵税共)で願ひます。(郵券代用の場合には總て一割増)
一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七
二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特
に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封
に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御
送金を願ひます。
一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひ
ます。

定 價

一ヶ月分一冊	金參拾五錢	送料貳錢
半々年分六冊	金貳圓拾錢	送料共
一ヶ年拾貳冊	金四圓貳拾錢	送料共

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)

大正十四年十月十日 印刷

大正十四年十月十五日發行

幼兒の教育 第二十五卷 第七號

不 許 複 製
禁 轉 載

編輯兼發行所
東京府豊多摩郡戸塚町大字戸塚五七五
堀 七 藏

印刷者
大杉直次郎
東京市牛込區山吹町一九八

印刷所
大杉印刷所

發行所
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
日本幼稚園協會
振替口座東京一七二六六番

廣 告

特等面一頁 金參拾圓	二等面一頁 金貳拾圓
一等面一頁 金貳拾五圓	一頁以下御斷

日本幼稚園協會に御申込下さい

文學博士

久保良英主幹
青木誠四郎主任

幼兒之研究 第一輯

菊判 洋綴
價 壹圓 廿錢
送料 拾八錢

低學年、幼稚園の教育は教育の根柢であります。ですから歐米のこの方面の研究、施設の發達には極めておどろくべきものがあります。本書はそれ等を知ると共に我學界の尊き研究の發表機關です。幼い小供のよき教育のために、本書の必讀を切に推奨致します。

目 概 容 内

幼兒に於ける數の發達について
幼兒の判斷作用について
幼兒生活理解の方法的立場について
尋一兒童の讀方及書方に關する研究
幼兒の實驗的研究の歴史
廣島高等師範學校文學博士
廣島高等師範學校文學士
東北帝國大學文學士
青木誠四郎
久保良英
長田新
黒川上
木下茂
川上茂
ライラ、ビケツ
アイオワ大學、バード、ポールドウイン

京城帝國大學教授
福富一郎新著
先生新著刊新

メンタル・テストの原理

菊判 全一冊 洋綴
紙數 五百 插畫 百
定價 金四圓五拾錢
送料 拾八錢

テストの結果標準を知らんとする人の爲めに提供す

入學試驗問題としてメンタル・テスト或はテスト形式の適用は、科學的正確といふことに對する人間の根柢深い要求によつて今や當然のことと考へられて來た。本書は我が國に於ける教育心理學の權威福富先生が久しき以前よりこれが理論及び實際についてなせる眞摯なる研究の成果で最も親切丁寧にして且つ基本的科學的な解決を得る近來の好著である。

巨理章三郎新著
先生主幹刊新

個性と教育

菊判 洋綴
定價 壹圓 五拾錢
送料 拾八錢
凡ての根本基調は徹底的に個性の研究殊に教育上個性の研究である。本書は斯道學會が各方面の大家を煩ひ公にした。

文學士
青木誠四郎譯

保育學校實際研究

全一冊 洋綴
定價 六拾錢
送料 拾八錢
最近ニュヨークに於てその實際を實驗した。研究の結果であつて幼い子供の教育にあたられる教師保母諸氏へすむ。

文學士
青木誠四郎著

兒童心理學序說

全一冊 洋綴
定價 貳圓 參拾錢
送料 拾八錢
本書は單に知識の敘述たるに止らず進んで兒童研究の方法を説いて其問題を提供した。

東京女高師前講師
黒瀬艶子著

幼兒の想像と其教育

全一冊 洋綴
定價 貳圓 五拾錢
送料 拾八錢
本書は幼兒の精神生活を虚心に凝視し、幼兒の世界の展開を明かにしたものである。

文學士
上野陽一著

學校精神検査法指針

全一冊 洋綴
定價 貳圓 七拾錢
送料 拾八錢
精神能力の發達の程度を測定する方を示し、結果を始末する仕方を明に示した。其結果は就學兒童の保健衛生百般に就いての深奥なる學理的と豊富な實驗である。教育家、學校醫諸君の必讀を乞ふ。

醫學博士
三田谷 啓著

學童保健

全一冊 洋綴
定價 貳圓 七拾錢
送料 拾八錢

兒童研究叢書

發行所 東京市牛込區 文庫書店 振替電話 東京三三三番 八三三番 四二二番 七二五番

幼児の最良運動具を提供します

此の運動具は理論家技術家實際家の最善
を盡したる研究の結晶であります

1925年式

鐵製運動具

鐵製フランク ¥ 65.00

" 辻 臺 ¥ 90.00

" 遊 動 木 ¥ 95.00

" 廻轉シーソー ¥ 70.00

" 廻轉馬椅子 ¥ 45.00

" 廻轉スケート ¥ 38.00



町谷ヶ指区川石小京東
館ルベール 株式會社

一〇三六川石小話電
〇四六九一京東替振